新編 大村市史

第五巻

付録

「付録」凡例

本付録は、資料、年表について収録した。

◆資料は、諸氏系図、特記略系図、各種表、家臣団構成、大村藩職制、指定文化財、大村市基本データ、『大村郷村記』人名索引、写真に見る市内の変遷と現在で構成されている。

◆一．諸氏系図は、大村氏系図（藩主家）、大村家家臣系図によって構成する。別途、詳細を掲げている。

◆二．特記略系図は、大村の歴史上特出した標題の人物の履歴と適宜前後の人名を掲載した。

◆三．各種表は、「天保十二年丑十月御領内惣高并惣竈人数書出」、藤野　保編『大村郷村記』全六巻（国書刊行会　一九八二）、大村史談会編『大村藩戸町村郷村記』（大村史談会　二〇一〇）を史料として、近世大村藩内の人口、寺院（古寺跡含）、牛馬等事項別に数値を抽出し一覧表化した。村名、項目などに相違がみられるのは史料によるものである。補足説明が必要な数値については、表中の村名の後に①などの数字、※を付け表下に註記した。大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編（大村市　二〇一五）からも一部収録。

㈠「天保十二年丑十月御領内惣高并惣竈人数書出」は、大村藩両家筆頭の大村（松浦系）氏に伝来した史料であり、昭和二十四年（一九四九）に子孫から藤野　保に寄贈された。同史料は、藤野　保編『大村郷村記』全六巻の原史料「郷村記」が編さんされる前、天保十二年（一八四一）十月時点の領内各村の数値を知る上で貴重であり、公開は本「付録」が初出となる。

㈡安政四年（一八五七）、幕末の開港に伴い、幕府は外国人居留地造成のため、幕府領長崎に近接した大村藩領戸町村を収公し、古賀村と交換した。このことが藤野　保編『大村郷村記』全六巻の原史料「郷村記」（文久二年（一八六二）完成）が編さんされる前であったため、同書に戸町村は含まれない。したがって、当村分は大村史談会編『大村藩戸町村郷村記』で補った。

◆四．家臣団構成は、大村藩の家臣について、諸史料から、格（階層）・石高（石）・役（役席）・人数（城下、村）に分

類しその構成を表示した。詳細は註に拠る。

◆五．大村藩職制は、諸史料から、家臣が就く役職の配置、座列などその組織を図示した。詳細は註に拠る。

◆六．指定文化財は、平成二十七年（二〇一五）十月時点の大村市内の国、県、市指定の史跡、有形文化財、無形民俗文化財、民俗文化財、天然記念物について、その名称、所在、指定年月日を一覧表化した。

◆七．大村市基本データは、市の面積と地図、人口、戦後からの財政状況、市歴代三役、歴代議長を収録した。

㈠戦後からの財政状況は、昭和期が二十年（一九四五）から六十年（一九八五）までの一〇年おき、平成期が五年（一九九三）から二十五年（二〇一三）までの一〇年おきの歳入・歳出を一覧表化した。

㈡市歴代三役は、市長・助役（副市長）、収入役の氏名と任期を記載した。

㈢歴代議長は、昭和十七年（一九四二）から平成二十八年（二〇一六）までの議長の氏名と任期を記載した。

㈣人口は昭和期が二十年（一九四五）から六十年（一九八五）までの一〇年おき、平成期が元年（一九八九）から二十五年（二〇一三）までの五年おきの人口を記載した。

◆八．『大村郷村記』人名索引は、藤野　保編『大村郷村記』全六巻を底本とし、人名、居住地、知行地、身分、石高等を一覧表化した。別途、詳細を掲げている。

◆九．写真に見る市内の変遷と現在は一部平成二十六、主に二十八年に市史編さん室が撮影した。

◆年表は、『新編大村市史』第一巻～第五巻に収録した主な出来事を抽出し、それを基本に適宜、『大村の歴史』『ワイド版角川新版日本史辞典』『国史大辞典』等を参考に日本史上著明な出来事を記載し補った。

◆資料の三、六、七、九、年表は編さん室で作成した。

資料

一　諸氏系図

諸氏系図　凡例

㈠文章は現代語で意訳した。

㈡人物履歴は元号年（西暦）を用いた。

㈢旧字は名前、固有名詞を含め、新字に変換した。

㈣史料は、「新撰士系録」『九葉実録』『大村見聞集』『大村郷村記』『大村藩戸町村郷村記』『新編大村市史』とした。

㈤出典表記は、各人物履歴の文末に新撰、九葉、郷村など略称を付し、各系図の項末に参考文献欄を設け、各人ごとの正式名称を付した。なお、『新編大村市史』は註にした。

㈥要約や解釈が困難な履歴文で記載必要分は、素記載又は（　）付にした。

一．大村氏系図（藩主家）凡例

①執筆内容は、生没年、誰の何番目の子、家督相続、藩主就任・隠居年、事跡特記事項若干とする。記載下限は現代編を考慮し、大村純毅までとした。

②執筆史料は大村家史料系図類、『九葉実録』『大村見聞集』『大村郷村記』など公的施設所蔵の公開及び公刊史料に限った。ただし、純雄、純英、純毅の履歴については、本巻や『大村純毅伝』などを用いた。

③体裁は、勝田直子「校訂大村氏系譜」（『九葉実録』別冊）を土台とし、藩主等の戒名も記載した。久田松和則「第二章第三節大村氏の出自」（『新編大村市史』第二巻中世編所収）も用いた。

④直澄～純毅までの線のみ、系図の各当主（人物）名の表記に左のとおり区別した。

実在確認可能…黒色、実在可能性（新説）…緑色、実在が否定的又は疑わしい…赤色

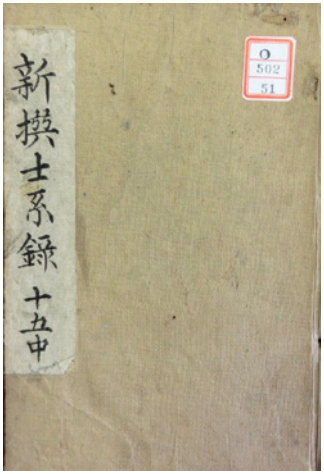

写真1　「新撰士系録」巻之十五中<表紙>
（大村市立史料館所蔵　大村家史料）

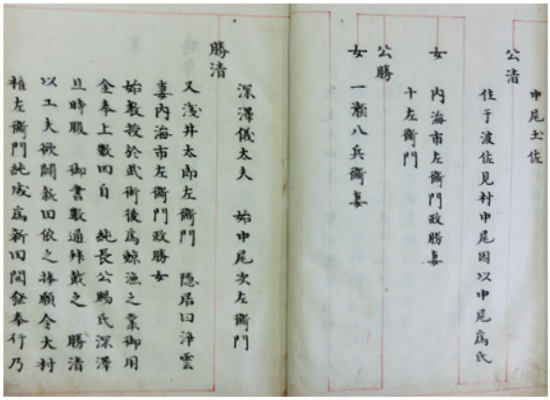

写真2　「新撰士系録」に記された系図（巻之十五中収載　深澤氏系譜）
（大村市立史料館所蔵　大村家史料）

二、大村家家臣系図凡例

①基本的に藤野　保「第三章第四節　家臣団の形成過程」（大村市史編纂委員会編『大村市史』上巻　大村市役所　一九六二）掲載の家臣系図に情報を追加した。そのほか、左記文献から近世を通じて続いた家系で大村藩の職制上重要な地位を占め、大村の歴史上特出した人物を輩出した家系を新たに抽出し、その系図を掲載した。

藤野　保「近世における大名家臣団の展開過程―大村藩『新撰士系録』を中心として―」（東京大學文學部内史學会編『史學雑誌』第65編第6号　史學会　山川出版社　一九五六）

藤野　保「大村藩　第一章第五節　家臣団の形成過程」（長崎県史編集委員会編『長崎県史』　藩政編　長崎県　吉川弘文館　一九七三）

藤野　保「第三篇　第三章　大村藩　第三節　一　家臣団の編成方式とその特色」（藤野　保『新訂　幕藩体制史の研究』（改訂増補）吉川弘文館　一九八三）

藤野　保「第一部Ⅴ大名家臣団の成立と展開」（藤野　保『日本近世史論考』―地域・比較・文献研究―　朝倉書店　一九九五）

②執筆内容は、家督相続、主な役職就任事項・事跡特記事項若干とした。

③各氏、宗家系統を記載した。

④人物の当該期藩主をなるべく併記するようにした。

⑤人物の居住地区が分かるものは記載した。

■一．大村氏系図（藩主家）（1）

直澄―師澄―永澄―清澄―遠澄―幸澄―忠澄―親澄―澄宗―澄遠―純興―純弘―純郷―徳純―純治

純伊―純前＝純忠―喜前―純頼―純信＝純長―純尹＝純庸―純富―純保―純鎮―純昌―純顕＝純熙

純雄＝純英―純毅

（凡例）＝養子

名前	履歴
直澄 初代	従五位下、遠江権守。初め河野七郎と名乗る。法名西岳隆光大禅定門。父藤原諸澄の戦死時には二、三歳であり、伊予国大洲（愛媛県大洲市）の山中に四〇年潜居。永延二年（九八八）、朝廷が天慶の乱を起こした祖父の藤原純友の霊を祀ったことにより、一族の罪が許され、直澄は肥前国藤津・彼杵・高来の三郡を下賜された。正暦五年（九九四）十月八日大村に入り、久原城に居住し、大村氏を名乗ったとされる。
師澄 二代	左衛門太郎。法名武棱義蟠大禅定門。
永澄 三代	五郎。法名仁岳義海大禅定門。
清澄 四代	修理亮。法名義岳龍光大禅定門。
遠澄 五代	修理太夫。法名玉瑞霊顔大禅定門。
幸澄 六代	丹後守。小字は藤太郎、法名瓊仙玉洞大禅定門。鎌倉幕府初代将軍源頼朝に御家人として仕え、京都大番役等を務める。代々にわたり藤津・彼杵を所領とし嫡子忠澄に譲る。経澄は嫡子でないため、高来郡を分与され、有馬氏の初代となる。

名前	履歴
忠澄 七代	丹後守。法名霊巌宗意大禅定門。肥前国の藤津・彼杵の二郡を領し、久原城に居住。兄の経澄と共に鎌倉御家人となり、京都大番役等を務める。兄弟が在京の時に御所に火災が発生し、経澄・忠澄は即座に御所を護り、その功は天皇が知ることになり、経澄・忠澄揃って御所に参内。そこで甜瓜（まくわうり）を勧められ直垂の袖で下賜されたところ、瓜の跡形は袖に鮮明に残って消えることはなかった。天皇に謁見したこの日は子孫累代の誉れであり、袖に残った瓜形を大村家の家紋（五木瓜紋）とした。
親澄 八代	丹後守。初め民部。小字は七郎太郎。法名秀岳芳林大禅定門。弘安四年（一二八一）の蒙古襲来の時、壱岐の瀬戸浦（壱岐市芦辺町）、筑前の博多で防戦し大いに軍功を挙げる。この功績で四代将軍から関東御教書を下賜される。嘉禎三年（一二三七）十二月二十九日に関東御教書が肥前国彼杵荘に届き、京都大番役以下の諸役を務めるよう命じられる。
澄宗 九代	伊豫守。初め民部。法名義哲道仙大禅定門。蒙古襲来の時、父親澄に従い戦功を挙げる。これにより父と共に御教書を下賜される。
澄遠 一〇代	弾正少弼、小字は新太郎。法名瑞光義翁大禅定門。元弘元年（一三三一）に南朝に属し、延元元年（一三三六）二月、菊池武俊と

名前	履歴
純興 一一代	共に少弐頼尚、仁木義長等と数回合戦し、軍功を挙げる。 豊後守。小字は新八郎。初め弾正少弼。法名勇鋭利到大禅定門。 元弘年間（一三三一～三四）から父澄遠に従い南朝に属し合戦。
純弘 一二代	紀伊守。初め弾正台。小字は武寿丸。法名法光寺幽岳龍光大禅定門。延文三年（一三五八）十一月、菊池武光と征西将軍宮懐良親王を奉じて、少弐頼尚、大友氏時等と戦い大勝。応安七年（一三七四）四月、室町幕府三代将軍足利義満が大軍を率い菊池武光討伐に際し、将軍を奉して武光と共に合戦。紫雲山延命寺を再興。明徳四年（一三九三）十月八日没。現在のところ、大村氏歴代系図はこの純弘代から信憑性があると思われる(1)。
純郷 一三代	治部大輔。純弘の子。法名寂照道讃大禅定門。 大炊介。純郷の子。天明六年（一七八六）慈眼院宗福日量大居士と追号。墓は大村織部屋敷にあり、後に本経寺に改葬（九葉）。
徳純 一四代	民部大輔。徳純の子。天明六年（一七八六）顕徳院睿明聰翁日昌大居士と追号。直澄から累代、久原城に居住したが、郡村の好武に築城し居住。高来郡領主有馬貴純と不仲となり、合戦を繰り返す。文明三年（一四七一）好武城で没し、郡村の竹松に埋葬。延徳四年（一四九二）に大般若経を松原八幡神社へ寄進する。
純治 一五代	長禄三年（一四五九）大村で誕生。純治の子。母は家臣朝長純泰の娘。妻は東純量の娘で、有馬貴純の姪。貴純の養女となる。文明三年（一四七一）家督相続、初めは大村館に居住したが、後に郡村今富に築城して居住、文明六年（一四七四）有馬貴純の攻撃を避け、折宇瀬、佐々村を経て、七年間加々良島（加唐島）に潜居、同十二年八月十五日に有馬軍と彼杵島田（東彼杵町蔵本郷）で戦い勝利、今富城・好武城に進軍して有馬軍を撃退し、同十六日に大村館に入ったと伝承される。有馬氏と和睦して貴純の娘を妻とする。明応元年（一四九二）八月上旬、貴純と共に佐々城、平戸箕坪城を攻め、松浦弘を配下とする。天文六年（一五三七）十一月二十一日大村で没し、郡村福重の里に埋葬。享年七九歳。法号明翁純哲大居士、または峻徳院日睿大居士。
純伊 一六代	丹後守。純伊の二男。妻は有馬純鑑（初め尚鑑）の娘。初め今富城に居住し後に大村館に移る。天文七年（一五三八）秋、有馬貴純の家督相続の礼のため、京都に上り、一二代将軍足利義晴、後継の義輝（一三代将軍）に謁見。将軍から宴席に接待される。九月二十八日京を離れ、帰領。「親俊日記」は京都出発を翌天文十八年七月二十三日とする。同十九年養嗣子純忠に家督を譲る。同二十年六月十五日、大村で没し、郡村白水寺に埋葬。法名寶山宗珍大居士、また追号高徳院日空。
純忠 一八代	丹後守。初め民部大輔。小字は勝童丸。号は入道理仙。天文二年（一五三三）、有馬で誕生。有馬晴純の二男で純前の養嗣子となる。実母は純伊の娘。妻は伊佐早（諫早）領主西郷純久の娘。天文十九年（一五五〇）に家督を相続。元亀二年（一五七一）長崎六町は南蛮諸国との貿易港となる（長崎南蛮貿易港として開港）。同三年七月二十日、伊佐早の西郷純堯・平戸の松浦鎮信・武雄の後藤貴明の三氏が三城を襲うが、七人（騎）の家臣が城を守る（三城七騎籠）。天正八年（一五八〇）、龍造寺隆信と和睦し、娘を隆信の二男江上家種に嫁がせる。天正十三年（一五八五）、豊臣秀吉から御教書を下賜され配下となる。同十五年五月十八日大村坂口館で没。享年五五歳。宝生寺に埋葬。万治年間（一六五八～六一）、本経寺に改葬。追号圓通院理仙日融大居士。
喜前 一九代 初代藩主	従五位下丹後守。小字は新八郎。初め喜純。純忠長男。永禄十二年（一五六九）、大村で誕生。妻は有馬義純の娘。天正十五年（一五八七）春、豊臣秀吉の島津征伐の時に泰平寺（薩摩川内市）で謁見し旧領安堵の朱印状を下賜される。同年、平戸の松浦鎮

名前	履歴
喜前（続き）	信の嫡男・久信に妹（後の松東院メンシア）を嫁がせ、早岐、針尾、日宇、折宇瀬、佐世保を化粧田（持参金）として持たせる。同年夏に長崎六町は秀吉に収公され直轄地となる。文禄元年（一五九二）四月二十八日、兵千人余を率いて朝鮮に出兵、忠州城、平壌旧都などを転戦し、慶長元年（一五九六）帰国。同二年正月十五日、再び朝鮮へ出兵し南原城、順天城で窮地の中を戦い慶長三年（一五九八）十二月に帰国。同年玖島城を築き居住。同七年、キリシタンを排斥しその教会を焼き、万歳山本経寺を建立。同十年長崎外町とその付属の村が直轄地として替えられる。慶長十二年（一六〇七）御一門払い（藩主家親族追放）を行う（見聞）。元和元年（一六一五）春、病で家督を嫡子の純頼に譲る。同二年八月八日大村で没。享年四八歳。本経寺に葬られ、法号顕性院普潤日照大居士。
純頼 二〇代 二代藩主	従五位下民部大輔。小字は新八郎。喜前長男。文禄元年（一五九二）、大村で誕生。妻は家臣楠本右衛門の娘で、大村頼直の養女。慶長十九年（一六一四）九月、幕命で鍋島、寺沢、有馬、松浦の諸氏と共に長崎の教会を破却。同年、加藤清正と協議し玖島城を改築。元和元年（一六一五）大坂夏の陣が起こり、五月一日、兵船を防州上関（山口県熊毛郡上関町）に進めたが大坂城は既に落城し、伏見及び京都で江戸幕府二代将軍徳川秀忠に謁見。同年家督を相続。同五年九月十六日、幕府から大坂城石垣修理の命を受ける。同年十一月十三日大村で没。享年二八歳。万歳山本経寺に埋葬。法号涅槃院覚翁日教大居士。
純信 二一代 三代藩主	従五位下丹後守。小字は松千代。純頼長男。元和四年（一六一八）十月九日、大村で誕生。妻は伊丹勝長（幕府勘定奉行、甲斐徳美藩主）の娘。元和五年（一六一九）、二歳の時に父純頼が亡くなり、十二月十日に大村彦右衛門純勝・富永忠清が密かに松千代（純信）を抱き大村を出発し、翌年正月二十一日、江戸に到着。

名前	履歴
純信（続き）	幕府に松千代の家督相続を懇願。元和六年（一六二〇）、前藩主純頼へ下命の大坂城石垣修理が未着手のため普請実施。元和六年五月十五日家督を相続。寛永十四年冬、島原一揆が起こるが、江戸在中の純信は病のために帰藩できず、大村純勝を長崎警固として派遣。慶安三年（一六五〇）五月二十六日、江戸で没。享年三三歳。江戸の藩主家菩提寺、長祐山承教寺（東京都港区高輪）に葬る。法号常照陰心月日秋大居士。
純長 二二代 四代藩主	従五位下因幡守。小字は権吉郎。後に権佐。寛永十三年（一六三六）八月二十一日、江戸で誕生。伊丹勝長の四男。実母は井上家次の娘。妻は家臣大村政直の娘。後妻は有馬康純（日向県〈延岡〉藩主）の娘。慶安四年（一六五一）家督を相続。明暦三年（一六五七）郡村でキリシタンが発覚したため、捕縛して長崎に送致（郡崩れ）。宝永三年（一七〇六）八月二十一日、江戸で没し承教寺に埋葬。享年七一歳。法号顕了院忠岳勇翁日長大居士。
純尹 二三代 五代藩主	従五位下筑後守。初め数馬。小字は源之助。純長二男。寛文四年（一六六四）三月二十一日、江戸で誕生。妻は織田信久（上野小幡藩主）の娘。元禄二年（一六八九）、二男ながら幕府の許可で嫡子となる。宝永三年（一七〇六）十月二十九日家督を相続。同七年に弟純庸を養嗣子とする。正徳二年（一七一二）十月十四日、江戸で没。享年四九歳。承教寺に埋葬。法号寛長院徳山日廣大居士。
純庸 二四代 六代藩主	従五位下伊勢守。初め伊織。小字は幾之助。寛文十年（一六七〇）正月十三日、大村で誕生。純長四男。実母は家臣大村長行の娘。宝永七年（一七一〇）純尹の養嗣子となる。正徳二年（一七一二）家督を相続。元文三年（一七三八）五月十三日大村で没。享年六九歳。本経寺に埋葬。法号元通院崇利了翁日貞大居士。
純富 二五代 七代藩主	従五位下河内守。小字は八太郎。正徳元年（一七一一）四月五日、江戸で誕生。純庸の二男。実母は江戸の舞子（九葉）で、家臣

名前	履歴
純富（続き）	諸星道之の養女。妻は本多正武（上野沼田藩主）の娘。享保十二年（一七二七）家督を相続。享保十八年（一七三三）、前年の飢饉で大村藩の餓死者はなく、八代将軍徳川吉宗から感状を下賜される。寛延元年（一七四八）十一月二十一日、大村で没。享年三八歳。本経寺に埋葬。法号慈光院正慧英翁日侃大居士。
純保 二六代 八代藩主	従五位下弾正少弼。小字は幾之助。享保十九年（一七三四）、大村で誕生。純富の長男。実母は京の笹井氏の娘で、家臣大村友晴の養女。妻は植村家包（大和高取藩主）の娘。寛延元年（一七四八）十二月二十七日家督を相続。宝暦五年（一七五五）六月二十七日、幕府から玖島城石垣修理の許可が降りる。宝暦十年（一七六〇）十二月二十四日江戸で没。享年二七歳。承教寺に埋葬。法号高燿院源明浄翁日鑑大居士。
純鎮 二七代 九代藩主	従五位下信濃守。小字は新八郎。宝暦九年（一七五九）、江戸で誕生。純保の二男。妻は松平容章（会津藩世嗣）の娘で、松平容頌（同藩主）の養女。後に離縁。宝暦十一年（一七六一）二月十六日家督を相続。寛政六年（一七九四）正月十日、火災で、江戸愛宕下（東京都港区西新橋）の大村藩上屋敷類焼。同年、幕府は上屋敷の土地を収公し、替地として永田町（千代田区）の宅地三六〇〇坪と白銀二五〇枚を下賜。寛政十年（一七九八）四月五日、隣地五〇〇坪を購入し、永田町の上屋敷の規模が拡大。白金村（港区）の下屋敷三〇三坪をその代価とした。文化十一年（一八一四）七月二十一日大村で没。享年五六歳。本経寺に埋葬。法号濬哲院憲章徳翁日新大居士。
純昌 二八代 一〇代藩主	従五位下上総介。小字春之進。初め純寿。純鎮長男。天明六年（一七八六）正月二十五日大村で誕生。実母は京の鉤氏の娘で、大村鎮直の養女。妻は亀井矩賢（石見津和野藩主）の娘。享和三年（一八〇三）正月二十三日家督を相続。文化五年（一八〇八）八月十五日、英国船長崎港に進入し出島オランダ商館員を人質に薪水等を求め、同商館の引き渡しを迫った、フェートン号事件に際し、純昌は十七日明け方、時津村を経て長崎警備に向かう途中、英国船の長崎出港の報が入る（九葉）。文政十一年（一八二八）八月九日・二十四日の大風で社寺・家屋の倒壊焼失が起こり溺死傷者を出し、山林田畑の荒廃など甚大な被害を受ける。天保五年（一八三四）九月三日、新田高五三二一石を加え領内石高は三万九〇〇九石一斗七升七合。天保九年（一八三八）十月五日大村で没。享年五六歳。本経寺に埋葬。法号崇謙院徳輝益翁日譲大居士。
純顕 二九代 一一代藩主	従五位下丹後守。初め伊織。小字民部。純昌の四男。文政四年（一八二一）十一月五日、大村で誕生。実母は家臣福田頼起の娘で、喜内の妹。妻は溝口直諒（越後新発田藩主）の娘で、直溥（同藩主）の妹。後に離縁。後妻は秋田孝季（陸奥三春藩主）の娘で、肥季（同藩主）の養女（実妹）。天保七年（一八三六）十一月二十三日家督を相続。弘化四年（一八四七）三月五日に病気療養のため幕府へ帰藩を請い、七日許可下り、十五日江戸を出発し、四月二十七日、大村に帰り隠居。明治十五年（一八八二）四月二日没。法号慈徳院温厚慤翁日栄大居士。
純熙 三〇代 一二代藩主（最後）	従五位下。丹後守。初め利純。小字修理。純昌八男で、純顕の実弟（母同じ）。天保元年（一八三〇）十一月二十一日、大村で誕生。妻は片桐貞照の養伯母。天保九年九月二十六日、大村純顕に従い大村を出発し、十一月十一日、江戸に到着。弘化三年（一八四六）、純顕の養子となる。翌年二月二十一日家督を相続。文久三年（一八六三）五月二十六日、長崎奉行、同年八月二十五日には長崎総奉行に任命。明治二年（一八六九）一月五日、版籍奉還の考えを奏上。六月二日、明治維新の戦功で賞典録三万石を下賜される。六月二十四日、大村藩知事となる。明治三年（一八七〇）、従四位に叙任。明治四年（一八七一）大村藩内

名前	履歴
純熙（続き）	一二ヵ所に学校を設置。七月十四日、廃藩置県により藩知事を辞任。九月東京に移住。十一月十二日、横浜港を出港しアメリカ・イギリス等を歴遊。明治六年（一八七三）一月七日、アメリカ・ヨーロッパから帰朝。明治十年（一八七七）、京都霊山に松林飯山碑を建立。明治十五年（一八八二）一月十二日、東京で没。享年五二歳。東京青山墓地に埋葬、現在は本経寺の大村家墓所へ合葬。
純雄 三一代	幼名を熊之進・武之進、後に武郎。日向佐土原藩主島津忠寛二男、嘉永四年（一八五一）四月二十七日佐土原で誕生。母は分家島津久房の娘茂子。妻は大村純熙の三女憲子。明治二年（一八六九）昌平大学校（旧昌平黌）に入学。同年九月アメリカ留学のために横浜出帆、ニュージャージー州ブロンスウッキのパブリックスクール、エール大学に学ぶ。明治九年六月二十日、大村憲子と結婚、大村家の養子となる。同年十月、長男純標（すみなが）早世（六ヶ月）。同年十一月、東京府御用掛士木課に勤務、後に勧業課に転じ第二回勧業博覧会も兼任。その後、二男純精（すみよし）生まれるが早世。明治十五年（一八八二）一月、養父大村純熙の死去に際し家督相続、従三位に叙任され大村純雄と改める。明治十七年（一八八四）子爵を授けられる。明治二十二年（一八八九）貴族院議員に当選。明治二十四年（一八九一）伯爵を授けられる。明治三十三年（一九〇〇）、大村小学校へ基本財産として一万円寄贈。その後、玖島学館拡張費として二度にわたり一万八〇〇〇円、二万一五〇〇円を寄贈。昭和元年（一九二六）隠居し大森の別邸に移る。昭和九年（一九三四）八月十八日、東京で没。八三歳。池上本門寺に埋葬。
純英 三二代	幼名を甲松という。分家大村武純（男爵）の長男、明治五年（一八七二）一月十六日に大村で誕生。母は田中氏の娘多喜。妻は真田幸民（伯爵）二女田鶴子。同二十二年（一八八九）陸軍幼年

名前	履歴
純英（続き）	学校入学。同二十五年（一八九二）陸軍士官学校入学。同二十七年（一八九四）陸軍見習士官となる。同二十八年（一八九五）日清戦争から広島宇品港へ凱旋。同二十九年（一八九六）四月二十四日、従兄の大村純雄の養嗣子となる。同三十年（一八九七）陸軍歩兵中尉に任命。明治三十二年（一八九九）六月一日、真田田鶴子と結婚、十二月十三日、甲松を純英と改める。明治三十五年（一九〇二）陸軍歩兵大尉に任命。明治三十八年（一九〇五）日露戦争から凱旋。明治四十年（一九〇七）二月、オーストリア留学、イタリア・スイス・フランス・イギリス・オランダ・ドイツを廻って帰国、十二月、陸軍歩兵少佐、近衛歩兵第三連隊付、翌年大隊長となる。大正三年（一九一四）同歩兵中佐、同七年には同大佐、歩兵第四六連隊長に任命。大正十二年（一九二三）陸軍少将、歩兵第一三旅団長に任命。同十三年予備役に編入、従三位に叙任される。大正十五年（一九二六）大村藩育英会が認可され、総裁となる。昭和二年（一九二七）、養父純雄の隠居に際し、家督を継ぎ、伯爵を襲爵。昭和八年（一九三三）五月八日、東京で没。正三位に叙任され青山墓地に埋葬。
純毅 三三代	大村純英長男、明治三十六年（一九〇三）四月十一日に静岡市で誕生。妻は松平保男（子爵）の長女芳子。明治四十三年（一九一〇）学習院初等科に入学。大正五年（一九一六）学習院中等科に入学、翌六年東京陸軍中央幼年学校に入学、同九年、陸軍士官学校予科に編入。大正十一年（一九二二）三月、士官候補生として静岡県三島の野戦重砲兵第二連隊に入隊、十一月、陸軍士官学校本科に入学。大正十三年（一九二四）陸軍砲兵少尉となり、三島の野戦重砲兵第二連隊付に補任。正八位に叙任。昭和二年（一九二七）従五位に叙任され、砲兵中尉に任命。十二月十九日、松平芳子と結婚。昭和三年（一九二八）長女正子、翌四年二女直子が誕生。昭和八年養父純英の死去に際し、家督

名前	履歴
純毅（続き）	を相続し、伯爵を襲爵。砲兵大尉となる。昭和十二年、日中戦争が起こり広島宇品港から中国大陸へ向かう、勲六等瑞宝章を授与。昭和十四年（一九三九）砲兵少佐となり、従四位に叙任。昭和十五年（一九四〇）同少佐、同十八年同中佐に任命。昭和二十年（一九四五）予備役に編入。昭和二十一年（一九四六）大村殖産株式会社を設立し、農産物・家禽類の生産加工・販売を行う。翌年、大一産業株式会社を設立し、豆炭・木材・農産物

名前	履歴
純毅（続き）	の生産加工・販売を行う。昭和二十六年（一九五一）東京から大村に転籍。昭和二十七年十二月十日、第五代大村市長に就任、以来同四十三年（一九六八）まで四期一六年務める。昭和四十五年（一九七〇）大村湾カントリー倶楽部社長に就任。昭和四十九年（一九七四）三月十一日大村名誉市民に推薦。四月十七日、大村市で没。享年七一歳。本経寺に埋葬。

（久田松和則）

註

（1）久田松和則「第二章室町時代第三節」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第二巻中世編　大村市　二〇一四　二八六～九一頁）。

引用・参考文献

「藤原姓大村氏世系譜」（大村市立史料館所蔵）

「紫雲山延命寺縁起」（大村市福重町、妙宣寺所蔵）

勝田直子「校訂大村氏系譜」（大村史談会編『九葉実録』別冊　大村史談会　一九九七）

「大般若経」第六〇〇巻奥書（佐賀市、富泉院所蔵）

福田清人ほか編『大村純毅伝』（大村純毅伝刊行会　一九七六）

勝田直子「大村純雄という人」（肥前を探る会編『肥前大村』第五号　肥前を探る会　一九九五）

■二、大村家家臣系図

一、松浦大村氏（五郎兵衛系）系図

（七代略）……松浦源太夫判官直……（十四代略）……松浦政―保―盛―大村頼直＝政直―純心―長直―富脩

―鎮直＝昌貞＝昌直＝泰

（凡例）＝養子

名前	履歴
松浦直政	判官。肥前国下松浦郡を所領とし、渡辺姓を改め松浦氏を名乗る。家紋は三星に引両梶葉（新撰）。
政	丹後守。法名本政。肥前国松浦郡のうち、相神浦、有田、今福、黒島の四村を所領とし、相神浦の大智庵城を居城とする。松浦肥前守興信に攻められ、天文九年（一五四〇）八月二日自害（新撰）。
盛	丹後守。松浦保の養子。有馬晴純の四男有馬五郎、母は大村純伊の娘（法名等覚院禅定尼）（新撰）。
大村頼直	右近。幼名龍松。幼年時に父盛と死別し母は共に大村に移り、大村純忠家臣長崎甚左衛門純景の娘婿となる。慶長十年（一六〇五）の長崎との替地によって領地を失った養父純景は筑後国久留米城主の田中吉政に仕えるが、頼直は従わず大村に残る。大村喜前から四八〇石、同純頼から三〇〇石の領地及び大村家の老臣として大村姓を下賜される。元和元年に二代藩主大村純頼の死去に伴い、幼君松千代（純信）の世継ぎを図り、大村彦右衛門純勝とともに幕府へ懇願する。結果、大坂城石垣普請を命じられ大坂に赴く。後に幕府から証人の差し出しを命じられ江戸に出府する。寛永二年（一六二五）江戸で没す（新撰）。純忠、喜前、純頼、純信期。
政直	内匠。幼名喜七郎。楠本内右衛門尉長男。妻は養父大村頼直の娘、寛永二年（一六二五）家老職となる。藩主純信の時に二〇〇石の加増を受け家禄一〇〇〇石となる。寛永十四年（一六三七）島原一揆の際、浦上西村で長崎警備に就く。乱の激戦化により島原への派兵を望んだが、幕府の命により長崎警備に専念する。正保四年（一六四七）にポルトガル船二艘の長崎港入港に際して、藩主純信に従い長崎警備に当たる（新撰）。純頼、純信期。
純心	右近。幼名松法師。妻は大村公頼の娘。万治元年（一六五八）家老職。同年三四歳で病没する（新撰）。城下本小路左列屋敷に住む（郷村）。純信、純長期。
長直	内匠。旧名織部。妻は北条氏信の娘。侍大将を経て、寛文三年（一六六三）家老職。藩主大村純長に従い二度参勤する。時津村に新田を開き家禄一〇二〇石となる。隠居後は昌軒と名乗る（新撰）。純長期。
富脩	次郎兵衛。初め織部。小字長次郎。妻は針尾幸納の養女（北条長氏の娘）。享保十一年（一七二六）藩主大村純庸の命で父長直の跡を受け先手侍大将となる。同年旧領を全て返還し家老職となる。藩主大村純富の名前の一字「富」をもらい富脩と名乗る（新撰）。純伊、純庸、純富期。
鎮直	織部。小字貞之助。初め直理。妻は浅田安生の娘。寛延元年（一

名前	履歴
鎮直（続き）	七四八）に側詰となり、その後近習を経て再び側詰となる。宝暦十三年（一七六三）家督を相続し家老職となり、兼ねて先手士大将となる。また藩主大村純鎮の名前の一字「鎮」をもらい鎮直と名乗る。同十四年には新田三六石余を、明和四年には新田四六石余を開く。明和八年（一七七一）から安永四年（一七七五）の間に藩主大村純鎮の初鎧の礼、袖留の礼、元服の礼に際して世話役、また院使饗応役を務める。享和元年（一八〇一）に家老職を辞す（新撰）。純富、純保、純鎮期。
昌貞	右近。小字龍松。初め直員。大村右近鎮章の長男。実母は針尾保納の孫娘。妻は片山友宜の娘。父鎮章が早世したために、享和元年（一八〇一）鎮直の孫に当たる昌貞が家督を継ぐ。その後、五教館寮生となる。文化二年（一八〇五）に藩主大村純昌から名前の一字「昌」をもらい昌貞と名乗る。同三年に新田二三石余を開発し加増される。同五年私領地のうち一〇〇石を松浦鉄十郎に分地して家禄一二一五石余となる。同十年病により辞職したが、同十四年に養子息子の離縁によって復職（新撰）。純鎮、純昌期。
昌直	五郎兵衛。初め直禎、環。大村景常の二男。実母は大村景俤の娘。妻は大村昌春の娘。文政三年（一八二〇）家督相続。同十年藩主純昌から名前の一字「昌」をもらい昌直と名乗る。天保十四年（一八四三）に格外家老職となる。嘉永五年（一八五二）に新田二石一斗四升一合を開発し、家禄一〇四〇石九斗一升六合となる。同年藩主純熙の江戸での婚儀を司る。安政二年（一八五五）五教館用懸となる。同三年西洋伝来の一二ポンド大砲を藩に献上する。万延元年（一八六〇）江戸事情視察の急命により江戸藩邸詰（新撰）。家禄一〇四〇石九斗二升（郷村）。慶応二年（一八六六）、保守派藩士から誹謗中傷される(1)。純昌、純顕、純熙期。
泰	秀作。浅田俊光の二男。実母は内海正閑の妹。妻は藩主純顕の娘旗。安政二年（一八五五）に昌直の養子となる。藩主幼君の素読相手を務める。同三年藩主大村純顕の二男於菟丸の側近となり同五年藩主純顕の娘と婚姻。同六年五教館表生となる。慶応二年（一八六六）、勤王三十七士同盟に抗し、反改革派同盟に加盟(1)。翌年、正月に三十七士加盟の家老針尾熙納と松林飯山を死傷させる事件が起こり、その後大村騒動に発展。加害者の一人雄城直記が捕縛され、自白により盟主の一人と判明し自害(1)。純顕、純熙期。

（久田松和則）

註

(1) 藤野　保「第四章幕末大村藩の基本体制と政治動向第二節第四項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

「松浦（大村）氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之四）…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

二　大村氏（彦右衛門系）系図

（凡例）＝養子

純方―純次―純辰＝純定―純勝―純茂＝長行―友晴―富敬―鎮義―鎮兵＝鎮友―昌春―顕朝＝爬宏
　└悦之助

名前	履歴
純方	通称大村采女正。大村徳純の三男。
純次	通称山城守。法名慶哲。老臣（新撰）。文明六年（一四七四）、有馬貴純が萱瀬村中岳原に攻め寄せたとき、参戦。鈴田道意の裏切りにより敗走。純伊に従い折宇瀬村や佐々村等を巡り歩き加唐島に潜居（新撰）。同十二年（一四八〇）、純伊の帰領に際し、川棚村三越浦に着岸（新撰）。大村軍、彼杵村島田で有馬軍と戦い松岳城に立て籠もる（新撰）。その後、鈴田道意が純次を頼り大村家への降参を願う（新撰）。純伊、願いを聴かず、純次の再三の諫言により許可（新撰）。佐世保村宮村等の所領を下賜される（新撰）。同年、道意と共に大村、有馬両家の婚姻用務を務める（新撰）。純伊の九男純淳を養子とし家を相続させ、郡村鬼橋に隠居するが再度大村家に仕え、家禄三〇石を下賜される（新撰）。後に純辰、純之の二子が生まれ、その後隠居料を純辰に譲る（新撰）。聖宝寺の北方山中に逆修碑がある（郷村②）。純伊期。
純辰	通称山城守。永禄六年（一五六三）、後藤貴明が郡村野岳に攻撃した際、同夜純忠に従い反撃（新撰）。純辰また功績があり、元亀三年（一五七二）、後藤貴明、松浦、西郷各氏が示し合せ三城を襲撃した時、純忠は純辰ら僅か七騎の兵をもって籠城（新撰、郷村①）。純辰は功績を上げ、父純次が隠居後、家禄三〇石を相続（新撰）。純忠期。
純辰（続き）	通称源次郎。大多和（大田和）次助の子。妻は純辰の娘。永禄十二年（一五六九）、葛峠で戦死。享年二二（新撰）。純忠期。
純定	通称彦右衛門。幼名彦次郎。妻は朝長純基の娘。後妻は朝長純安の娘で故小佐々兵部の妻。三妻は今村勝高の娘。二歳で父純定が戦死し、純忠の近くで、育つ（新撰）。天正十四年（一五八六）夏、長与領主長与純一が叛逆。居城の浜城を攻め、一番乗りし落城させる（新撰）。純勝は、キリスト教が邪教との認識を持ち、喜前に密談（新撰）。元和五年（一六一九）、純頼が死去し純勝は松浦頼直と共に二歳の松千代（純信）を連れ江戸に赴く（新撰）。純勝は何度も松千代の家督相続を老中に願い、翌年相続を許可される（新撰、見聞）。寛永七年（一六三〇）、三代将軍徳川家光は純勝の旗本への任用を計画したが、純勝は固辞（新撰）。最初家禄は一七〇石余。後に後妻が持参した禄を加え二二〇石余。家督を後妻の子純正に譲り隠居（新撰）。再度復帰の命を受け、新たに四〇〇石を下賜され、再度家老に就く（新撰）。生涯での加増合計一二〇〇石余（新撰）。四〇〇石余を支族に分与し、八〇〇石余を実子純茂に譲る（新撰）。承応二年（一六五

名前	履歴
純勝（続き）	三）、これまで純勝の屋敷で庶政を行っていたが新たに評定所を設置し同所で庶政を行う（九葉①）。翌年（一六五九）、九二歳で死去（九葉①、新撰は九五歳）。墓は久原前船津の丘。同家代々の墓地となる（郷村①）。純忠、喜前、純頼、純信期。
純茂	通称弥五左衛門。小字彦次郎。隠居名行圓。妻は大村喜前の娘。元和六年（一六二〇）、九歳で幕府の証人（人質）となり、江戸で二代将軍徳川秀忠に拝謁した後、弟純成と代って大村に戻り家老となる（新撰）。寛永五年（一六二八）、タイオワン事件のオランダ人を幕命で預かり、オランダ牢の用務を主導（見聞）。慶安三年（一六五〇）五月二十六日、純信死去に際し、幕府老中は純茂に長崎警備を命じる（九葉①）。同年、純長（四代藩主）の大村藩主家家督相続を主導する（新撰）。また純長の養子に際し、大村藩重臣の一人として伊丹家への誓書に署名血判する（九葉①、見聞）。明暦三年（一六五七）、郡崩れ囚徒の処分を主導（九葉①）。翌万治元年（一六五八）、郡崩れの件で長崎奉行と協議（九葉①）。純長期、先鋒右備部将となる。藩における武役の最初（新撰）。寛文七年（一六六七）、死去（九葉①）。喜前、純頼、純信、純長期。
長行	通称彦右衛門。幼名彦次郎。兄純茂の実弟で兄の養子。妻は針尾長納の娘。幼少期は証人（人質）として江戸滞在（新撰）。寛文七年（一六六七）、兄の死去に伴い家督を継ぐとともに、家老となり、先手右備部将を兼務（新撰、九葉①）。延宝五年（一六七七）、三重村で覆船を監検（九葉①）。貞享四年（一六八七）、純長の武部八幡神社参詣に従う（見聞）。元禄二年（一六八九）から年番の家老が藩士の私領地を総轄することとなり、当年の担当となる（九葉①）。同十二年（一六九九）、加番と月番を免除され、大年寄格となる（新撰、九葉①、見聞）。同十四年（一七〇一）、隠居し友晴に家督を相続させ家老及び隊長となる（九葉①）。翌年、死去（九葉①）。純長期。
友晴	通称弥五左衛門。幼名彦次郎。隠居名清淳。妻は大村長興の娘。元禄十二年（一六九九）、評定所見習（九葉①）。同十四年（一七〇一）、父の隠居に伴い家督を相続し、家老及び先手右備部将、隊長となる（新撰、九葉①）。翌年、郷村記撰述総奉行となる（九葉①）。宝永三年（一七〇六）、純長江戸で死去し、遺髪と法名を誌した紙冊を彼杵村の妙法寺で出迎える（九葉①）。同年、純長着用の着物や刀を形見として下賜される（九葉①）。享保二年（一七一七）、オランダ船の長崎港外伊王島来航に際し、大村領内浦上村を警固（九葉①）。同四年（一七一九）、友晴以下一一人による知行制改革についての連署建白書。地方知行制から蔵米知行に改める（九葉①）。同年、元締方一切の事務を主導（九葉①）。同六年（一七二一）、元締役辞職（九葉①）。同九年（一七二四）、大元締となる（九葉①）。同十七年（一七三二）、享保の飢饉に際し、御用米や幕府からの借入などを主管（九葉②）。翌年、隠居（九葉②）。享保年間（一七一六～三五）、外浦小路に居住（見聞）。純長、純尹、純庸、純富期。
富敬	通称彦右衛門。弥次郎。妻は大村純庸の娘幸。後に離縁し帰家。兄病死により嫡子となる（新撰、九葉別）。享保十七年（一七三二）、評定所見習となり、後に用人を命じられ、庶務を習う（九葉②、新撰）。同年、享保の飢饉に際し、御用米の用務を務める（九葉②）。翌年、家督を相続し、家老兼先手右備部将となる（新撰）。元文四年（一七三九）、純富から名前の一字「富」を与えられ、富敬と名乗る（新撰、九葉②）。同年、屋敷が火災で焼失し課役免除（九葉②）。寛延元年（一七四八）一一月、純富逝去に伴い、純保の藩主家相続を幕府へ願い、翌十二月に許可（九葉②、新撰）。宝暦十年（一七六〇）十二月、純保が羅病の時、純鎮は二歳であったため、純信の例に倣い、純鎮の家督相続を

名前	履歴
富敬（続き）	幕府へ願い、翌年十二月に許可（新撰）。同年、オランダ船の長崎入出港を監視（九葉②）。純富、純保、純鎮期。
鎮義	通称弥五左衛門。内蔵丞。小字彦太郎。名前は友貞。妻は大村富脩の娘。家督相続前に純保の御側用達を務め、近習番頭となる（新撰）。宝暦十一年（一七六一）、用人（九葉②、新撰）。明和七年（一七七〇）、父富敬の家督を賜り、家老兼士大将（先手右備部将）となる（新撰、九葉②）。同年、純鎮から名前の一字「鎮」を与えられ、鎮義と改める（新撰）。安永二年（一七七三）、隠居及び外出禁止を命じられる（九葉②）。寛政十二年（一八〇〇）、外出禁止を解除され、別荘に謹慎する（九葉②）。純保、純鎮期。
鎮兵	通称弥治郎。名前は友休。妻は大村鎮直の娘。安永二年（一七七三）、家督を相続し、家格前例のままと命じられる（新撰）。翌年、家柄を重んじ評定所見習を命じられ、家老嫡子席次座となる（九葉②、新撰）。同五年（一七七六）、先手士大将（先手右備部将）（九葉②）。同年、純鎮から名前の一字「鎮」を与えられ、鎮兵と改める（新撰）。同七年（一七七八）、純鎮の江戸参勤に従い、江戸表での御用部屋出席政務方及び御広間並びに使者等の見習を命じられる（九葉②、新撰）。翌年、純鎮に従い、江戸に行き病死（九葉②）。純鎮期。
鎮友	通称兵部。伊賀之助、美濃之進。名前は友邑、尭夫。小字為次郎。鎮義の二男で鎮兵の弟。兄鎮兵が江戸で病死後、養嗣子となる。妻は浅田鎮至の娘。安永八年（一七七九）十月、家督を相続し、家老嫡子席次席（九葉②、新撰）。寛政二年（一七九〇）、五教館寮生を経て、同五年（一七九三）、評定所見習兼側用達、同九年（一七九七）、家老兼先手士大将（九葉②、新撰）。後に純鎮から名前の一字「鎮」を与えられ、鎮友と改める（新撰）。文化元年（一八〇四）、純昌は大村龍松（松浦系大村家）と共に、今後、「両家」の称号を命じられる（九葉③、新撰）。私領地の滑

名前	履歴
鎮友（続き）	石村（長崎市）への隠居を命じられる（新撰、九葉③）。同年、子に家督を相続（九葉③）。同五年（一八〇八）、家老不足に伴い臨時の雇家老に任じられ、尭夫と改名（九葉③、新撰）。同年、理財事務を任され、大坂へ赴く（九葉③）。同八年（一八一一）、屋敷地を下久原に与えられる（新撰）。同九年（一八一二）、隠居するが、藩命で隠居を延期とし、江戸、大坂で勤務（新撰、九葉③）。同年、不行跡のため、私領地の音琴（東彼杵町）に蟄居謹慎。同十四年（一八一七）、蟄居を許す（九葉③）。文政三年（一八二〇）、再度音琴に遷居（九葉④）。純鎮、純昌期。
昌春	通称彦右衛門。小字豊松。名前は友訓。妻は針尾政納の妹。家禄八四六石九斗六升（新撰）。文化二年（一八〇五）、家督相続（九葉③、新撰）。幼少のため、親類が補佐（九葉③）。同八年（一八一一）、藩主家に近侍し素読相手となる（新撰）。同十一年（一八一四）、五教館出入を命じられる（新撰）。先手左備都督となる（九葉③）。同年、夏の長崎蔵屋敷詰の主管を両家の定職とするが、幼少中は親類の福田逢見に代役させる（九葉③）。文政元年（一八一八）、家格である士大将を務め指揮（新撰）。同五年（一八二二）、純昌から名前の一字「昌」を与えられ、昌春と名乗る（新撰、九葉④）。天保二、四、五年（一八三一、三、四）、純昌病気に際し、藩主代理を務める（九葉④）。同六年（一八三五）、死去（九葉④）。純昌期。
顕朝	通称彦次郎。初め名前は友彰。天保六年（一八三五）、家督を相続（新撰）。同十一年（一八四〇）、藩主家の和漢藉素読の相手役となる（新撰）。同十三年（一八四二）、五教館の寮出入を許可（新撰）。弘化三年（一八四六）、フランス船三艘、長崎来航に際し、仮の家老として純顕に従い警備（九葉④）。同五年（一八四八）、純顕から名前の一字「顕」を与えられ、純顕と名乗る（新撰）。嘉永二年（一八四九）、アメリカ船長崎来航に際し、領

名前	履歴
顕朝（続き）	内戸町村大浦を警固（新撰）。同五年（一八五二）、甲冑押行列に出る（新撰）。安政元年（一八五四）、病気のため隠居願いを藩へ提出し、養子に家督を相続（九葉⑤）。同三年（一八五六）、病死（九葉⑤）。純昌、純顕、純熙期。
熙友	通称邦三郎。名前は友直。北条氏恒の弟。妻は浅田俊光の娘。嘉永七（安政元）年（一八五四）、家督相続後、五教館寮出入を命じられる（九葉⑤、新撰）。安政三年（一八五六）、西洋伝法の一二ポンド石火矢（鉱筒）一挺を献上（新撰、九葉⑤）。翌年、純熙から名前の一字「熙」を与えられ、熙友と名乗る（九葉⑤、新撰は安政五年）。保守派藩士を自宅に集め、血判誓書し首領の一人となり、改革派（勤王三十七士同盟）に対抗。翌年、正月の城中謡初の帰りに針尾九左衛門を襲撃し負傷。同じく松林飯山を襲撃し殺害し大村騒動に発展（九葉⑤）。慶応三年（一八六七）、稲田東馬ら大村騒動の加害者のうち、邦三郎と弟・泰次郎の処分を検討。両人とも両家であるため処分方法は慎重を極めたが、自害に決定（九葉⑤）。勤王三十七士同盟者柴江運八郎、浅田進五郎と面会。浅田と熙友は親類（九葉⑤）。純熙への謝罪の遺書と辞世の歌を残し、渡辺昇の前で自害（九葉⑤）。滑石村に懸持知行三八七石七斗四升四勺（郷村④）。家禄八四六石九斗六升（郷村①）。外浦小路居住（郷村①）。純熙期。
悦之助	通称璋一郎。慶応三年（一八六七）、義祖父顕朝の家督を相続（九葉⑤）。純熙期。

（田中　誠）

引用・参考文献

「大村氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之二）…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第一、二、四巻（国書刊行会　一九八二）…郷村①、②、④

大村史談会編『九葉実録』第一～五冊、別冊（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤、別

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

三　福田氏（宗家・熊野系）系図

平兼盛―福田包信―兼俊―兼重…（二代省略）…兼信―兼澄…（二代省略）…兼家…（二代省略）…純定

通兼―兼次―忠兼―兼親―兼政―長方―熊野長奥―長紹―兼明―兼孝＝包行＝包隆＝包清―包道

（凡例）＝養子

名前	履歴
平兼盛	通称隈平三。包守、包盛とも。　治承四年（一一八〇）、老手、手熊両村（長崎市福田、手熊）の定使職に就き土着（新撰、郷村⑥）。
福田包信	福田を名字とする。通称福田平次。文治五年（一一八九）、源頼朝から手熊、老手村地頭職に任命され、同所領を安堵（新撰）。
兼俊	通称福田某。福田、手熊村の所領を継承し、嫡男兼重に相続させる（新撰）。
兼重	通称福田四郎。法名正願。文永十一年（一二七四）、モンゴル襲来（文永の役）に対し、博多湾岸で奮戦（新撰）。弘安四年（一二八一）、再度、モンゴル軍が襲来し、鷹島（松浦市）で、モンゴル軍を打ち払う（新撰）。正応二年（一二八九）、軍功により肥前国神崎荘に所領を与えられる（新撰）。子の兼光も弘安の役に際し志賀島（福岡市）で軍功があり、正応六（永仁元）年（一二九三）、異国警固番役を務める（新撰）。
兼信	通称三郎入道。法名理慶。正慶二年（一三三三）、鎌倉幕府討幕に際し、鎮西探題北条英時の征伐に一族を率いて参戦（新撰）。建武元年（一三三四）、九州の幕府方残党を征伐し、翌年、豊前国神崎村の一部を与えられる（新撰）。同年、新田義貞の征伐に参戦。後、南朝軍の肥後菊池氏の征伐に参戦し、足利将軍から軍忠状を下賜される。暦応二年（一三三九）、博多警固番役を務める（新撰）。貞和六（観応元）年（一三五〇）、室町幕府から彼杵荘内福田村の地頭職に任命されるとともに、同国神崎荘内にも田地と屋敷を与えられる（新撰）。
兼澄	通称孫平次。号は兵庫助。正平二十四年（一三六九）、彼杵荘福田大浦と浦上の田畑等を安堵され地頭職を務める（新撰）。
兼家	通称兵庫充。応永十一年（一四〇四）、彼杵一揆加盟者として彼杵郡俵坂で大村氏、白石氏と合戦（新撰）。その後、幕府に敵対する藤津郡内・嬉野等在所の城を陥落させ、軍忠状を下賜される（新撰）。

名前	履歴
純定	通称大和守。応仁文明年間（一四六七～八七）、大村純伊が折宇瀬村（佐世保市）、佐々村を経て加唐島（唐津市）へ潜居した際に助力。純伊の大村復帰後、親交を結ぶ（新撰）。純伊期。
通兼	通称諸童丸。号は又次郎。
兼次	通称左京亮。法名宗軒。永禄年間（一五五八～七〇）、大村氏に助力。純忠から密書を与えられる（新撰）。純前、純忠期。
忠兼	通称大和守。大村純忠から名前の一字「忠」を与えられ、忠兼と名乗る（新撰）。天正七年（一五七九）、式見狩野介が叛逆したため、討手を務め、勝利し式見村を下賜される（新撰）。同十四年（一五八六）、大村家が手熊村の舞岳城、その後、宮尾城を取り上げる（新撰）。永禄年間から天文十四年（一五四五）まで近隣の郡や村などで合戦が続き、これにより純忠から領地安堵の書状を複数下賜される（新撰）。また、高来郡の有馬晴純、義直（義貞）、義純、晴信から忠義褒賞の書状を下賜される（新撰）。義純と義貞の書状には、伊佐早の西郷但馬父子と五ヶ浦の勢力や深堀氏が叛逆し龍造寺隆信の傘下となったとある（新撰）。純前、純忠期。
兼親	通称半兵衛。法名宗半。妻は純忠の娘（寂而院）（九葉別）。文禄元年（一五九二）、豊臣秀吉の朝鮮出兵で兼親は小西行長の与力を務め、慶長三年（一五九八）、喜前とともに帰国（新撰）。同年、主従（君臣）関係を結び、大村家臣となり大村に移り住む（新撰）。翌年、玖島城下に屋敷を下賜される（新撰）。同年、弟が式見村を下賜され別家する（新撰）。喜前期。
兼政	通称勝兵衛。妻は大村公種の娘。
長方	通称十郎左衛門。妻は大村純勝の娘。八木原村（西海市）一三〇石を加増され、家禄六〇〇石。家老兼先手左備士大将を務める（新撰）。慶安三年（一六五〇）、純長（四代藩主）を養子に迎

名前	履歴
長方（続き）	えるに際し、大村藩重臣の一人として伊丹家への誓書に署名血判する（九葉①、見聞）。明暦三年（一六五七）、長崎奉行黒川正直が長方ら大村藩家老に郡村の兵作を捕縛した旨通達。長方は藩兵を率い、囚徒を捕縛（新撰、九葉①）。万治元年（一六五八）、長崎奉行が郡崩れの囚徒を放虎原で斬首した際に立ち会う（九葉①）。延宝五年（一六七七）、病気で家老と隊長を辞職（九葉①）。純信、純長期。
熊野長奥	通称丹下、主水、勝兵衛。隠居名長山また喜山。妻は大村勝正の娘。後妻は土肥長景の娘。名字を熊野に改める（新撰）。城代を務める（新撰）。
長紹	通称十郎左衛門。最初、熊野権六。名前は包成と名乗る。妻は純長の娘。純長から名前の一字「長」を与えられ、長紹と名乗る（新撰）。元禄十四年（一七〇一）、大村内匠らが長紹の屋敷で国語の講習を行う（九葉①）。正徳三年（一七一三）、郡崩れの兵作の子長次郎（七〇歳）が大村牢内で没した件で用務を担当（九葉①）。純尹在世中に家老を務める（九葉①）。享保二年（一七一七）、隠居し家督を長男・平蔵へ譲る（九葉①）。純長、純尹、純庸期。
兼明	通称長兵衛。最初、一学また平蔵と名乗る。小字は権十郎。妻は伊丹氏の娘。正徳五年（一七一五）、平戸藩領黒島（佐世保市）に異国船停泊の話を聞き、大村藩兵を率い、船二〇艘に分乗させ、面高領海を警戒。異国船は発見できず（九葉①、見聞）。享保二年（一七一七）、家禄五〇〇石で家督を相続し、座列は城代席（九葉①）。同七年（一七二二）、異国船が度々福田浦に漂流したため、同地に出向く（新撰）。享保九年（一七二四）から元文元年（一七三六）までの六月から九月の期間、福田番を務める（新撰）。純庸、純富期。
兼孝	通称福田十郎左衛門。幼名平四郎。妻は大村富脩の娘。元文四年（一七三九）、片町の火災で屋敷類焼（九葉②）。寛延元年（一七四八）、城代となり、後に家士武術備方、番頭等を兼務（九葉②、新撰）。安永四年（一七七五）、家老兼脇備左士大将となり、純鎮から名前の一字「鎮」を与えられ、鎮方と改める（新撰、九葉②）。文化十一年（一八一四）、後継者を包行とし、本小路に屋敷を下賜（九葉③）。純富、純保、純鎮、純昌期。
包行	通称与。最初、万治と名乗る。大村包生の兄。妻は福田兼孝の娘。文化十一年（一八一四）、親類願によって兼孝の名跡を相続するよう命じられ家禄六〇石（私領地三〇石、蔵米三〇石）を下賜される。また、本小路の北条外衛屋敷を下賜される（新撰、九葉③、郷村①は岩船）。純鎮期。
包隆	通称平四郎。最初、豊後之進、また勝兵衛を名乗る。熊野維玄の三男。家禄六〇石（新撰）。文化八年（一八一一）、実兄為雄の養子となり座列を家老嫡子席とし、藩主家の武術の相手役となる。同十年（一八一三）、為雄の病死によって翌年、包行の養子となる（新撰）。同十三年（一八一六）、家督相続後、備駒立御手伝となる。同十一年（一八二八）、近習加番となり、純昌の武術相手及び頭取を務める（新撰）。その後、江戸で広間番を務める（新撰）。天保十一年（一八四〇）、帰藩後に近習のまま士鉄砲支配、後機士支配を歴任し、近習番頭、使番を務める。弘化二年（一八四五）、不始末により逼塞（九葉④）。純昌、純顕、純熙期。
包清	通称与。最初、雄三郎、逸蔵と名乗る。井石英彦の三男。妻は養父包隆の二女。家禄六〇石（郷村①）。嘉永三年（一八五〇）、家督相続。同年、岩船から小姓小路へ屋敷替（新撰、郷村①）。安政三年（一八五六）、大目付、同五年（一八五八）、用人（新撰、九葉⑤）。文久二年（一八六二）、持筒者頭を兼ね、元治元年（一八六四）、放免（新撰、九葉⑤）。純昌、純顕、純熙期。

名前	履歴
包道	通称駒之助。安政元年（一八五四）、藩主家の漢文素読の相手役を務め、同三年（一八五六）、五教館表日勤生となるが早世（新撰）。純熙期。

（盛山隆行）

引用・参考文献

「福田氏系譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之八上）…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第一、六巻（国書刊行会　一九八二）…郷村①、⑥

大村史談会編『九葉実録』第一～五冊、別冊（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤、別

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

四. 福田氏（大村系）系図

包辰＝大村富包＝包生＝包英＝包光

（凡例）＝養子

名前	履歴
包辰	通称熊野郷助。熊野長紹の二男（新撰、九葉別）。母は大村純長の娘増。妻は大村純庸の娘橘。享保二年（一七一七）分家し、家禄一〇〇石。座列は馬廻席。後に加増され、家禄一五〇石（新撰、九葉①）。徒士頭、先手者頭、作事奉行を歴任（新撰）。同十三年（一七二八）、用人となる（九葉②）。同十七年（一七三二）、享保飢饉に際し、玖島城預りの幕府城附米二七〇〇石を大坂へ送る用務を主管（九葉②、見聞）。同十八年（一七三三）、本小路に居住（九葉②、郷村）。後に中老（新撰）。純長、純尹、純庸期。
大村富包	通称大村右京。最初、靭負、典膳。大村純庸の三男。母は純庸

名前	履歴
大村富包（続き）	側室シヲ。妻は富永一興の娘。享保十八年（一七三三）、生誕（九葉②）。元文二年（一七三七）、包辰から家督相続（新撰）。兄純富から名前の一字「富」を与えられ、富包と名乗り、靭負の仮名を下賜（新撰）。寛延二年（一七四九）、大村純保の後見となり、大村の名字を下賜される。座列は城代上座。家禄二〇〇石（新撰、九葉②）。別は義嗣子。天明四年（一七八四）、城代を退職するが、座列は元のとおり（新撰、九葉②）。寛政五年（一七九三）、死去。六本松（玖島二丁目）墓地（九葉別）。純庸、純富、純鎮期。
包生	通称靭負。小字政次郎。大村直格の四男で針尾保納の孫。母は大村富敬の娘。妻は三好富次の娘で富包の養女。家禄二四一石

名前	履歴
包生（続き）	五斗二升（新撰）。寛政十一年（一七九九）、城代（九葉②）。文化元年（一八〇四）、ロシア使節レザノフの長崎来航に際し、家老代として長崎蔵屋敷で二回在勤（新撰、九葉③）。同十一年（一八一四）、近習騎総（藩主側近騎馬大将）脇備都督（九葉③）。純鎮、純昌期。
包英	通称豊蔵、後に求馬。妻は片山友宜の娘。享和二年（一八〇二）、藩主家の素読相手役。後に五教館寮生、射術頭取、馬術頭取（新撰）。天明四年（一七八四）、見習城代となり、福田番、長崎使を兼任し、座列を先手者頭・近習番頭とする（九葉②）。文政七年（一八二四）、治振軒稽古頭取を退職（九葉④）。天保二年（一八三二）、家督を相続し、広間頭番となる（新撰）。純昌期。
包光	通称六兵衛、後に政之充。佐々木直克の二男。妻は岩永前弼の娘。天保三年（一八三二）、家督を相続し、同八年（一八三七）、藩主家の素読相手役。後に五教館寮生と純顕の能の相手役を務める。同十五（弘化元）年（一八四四）、広間番入に命じられ、安政二年（一八五五）、先手大砲支配及び射内頭取（新撰、九葉⑤）。同五年（一八五八）、近習加番を兼務（新撰）。万延元年（一八六〇）、脇備士鉄砲支配（新撰）。文久二年（一八六二）、江戸で馬廻と広間番を務める（新撰）。家禄二四一石五斗二升（郷村）。純昌、純顕、純熙期。

（盛山隆行）

引用・参考文献

「福田氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之八上）…新撰

大村史談会編『九葉実録』第一～五冊、別冊（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤、別

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

五．福田氏（隈系）系図

兼重―兼本＝長兼―兼快―兼暢＝兼明＝兼兵―隈鎮豊―包氏―包寛

（凡例）＝養子

名前	履歴
兼重	通称式見六之充。福田忠兼の二男。妻は天久保武蔵の娘。文禄元年（一五九二）、朝鮮出兵に一六歳で兄兼親と従軍。軍功により旗奉行となり、母衣着用を許可される。中納言兼岡山城主宇喜多秀家から馬の鞍を下賜される（新撰）。喜前から新たに私領地二三〇石を下賜される（新撰）。慶長二年（一五九七）、朝鮮出兵に従軍し軍功（新撰）。喜前期。
兼本	通称熊野市郎左衛門。法名宗清。妻は大村純直の娘。後妻は大村純広の娘。三妻は今里善右衛門の娘。四妻は林久兵衛の娘で峰純勝養女。寛永十四年（一六三七）、島原一揆に際し足軽大将となり、幕府軍上使への使節を務め斥候も兼ねる（新撰）。寛永年間（一六二四～四四）の領内検地の時に今村の旧領三〇石分を式見村内に下賜される（新撰）。明暦三年（一六五七）、郡崩れの捕縛者を平戸藩及び島原藩へ送致引率（九葉①、見聞）。万治元年（一六五八）放虎原で郡崩れの罪人処罰に立ち会う（新撰①）。老年のため家督を嫡子兼真に譲るが兼真は夭死。嗣子がなく、再度当主となる（新撰）。後に兼定を養子とし、兼真の娘と婚姻させる（新撰）。兼定に家督を譲る時、普請奉行を務める（新撰）。後に長兼を養子に迎え分家とした（新撰）。純頼、純信、純長期。
長兼	通称熊野新助。最初、是非之助。河野正重の四男婿養子。実母は藤﨑安右衛門の娘。妻は兼本の娘。純長から名前の一字「長」を与えられ、長兼と名乗る（新撰）。養父兼本の隠居禄一〇〇石を相続。初めて近習後に徒士頭、大目付、用人を歴任（新撰）。純長期。
兼快	通称市郎左衛門。最初、十太郎、多門、または、是非之助、平内。妻は片山玄与の娘。士鉄砲支配、近習番頭、脇備者頭、江戸聞番、先手者頭、用人を歴任（新撰）。享保七年（一七二二）、江戸で中老格となる（九葉①）。この間、純庸の隠居に伴い大村へ帰る（新撰）。享保十二年（一七二七）、隠居（新撰、見聞）。享保年間（一七一六～三五）は外浦小路居住（見聞）。純庸、純富期。
兼畅	通称宇右衛門。熊野兼則の二男。実母は一瀬孫六の娘。妻は喜多重時の娘で小佐々辰昌の養女。家督相続前、近習加番を務める（新撰）。家督相続後に備方、武具方を務め、先手長柄奉行となる（新撰）。寛延二年（一七四九）、純保が藩主として初大村入の時、幕府への使者として江戸へ赴き病死（新撰）。純富、純保期。
兼明	通称一郎左衛門。最初、十太夫、または是非之助、七十郎。兼紀の長男。妻は小佐々頼雄の娘。藩命により、稲毛元亮を師範として剣術を学ぶ（新撰）。先手取次役、使番、武役兼務のまま宗門奉行兼寺社奉行、脇備者頭、先手者頭、側筒者頭を歴任（新撰）。
兼兵	通称新助。最初、西三郎。熊野兼方の長男。実母は大村徳直の娘。妻は養父兼明の娘。安永七年（一七七八）、養父の家督を相続（新撰）。天明七年（一七八七）、江戸聞番添役、武具方を務め、江戸城で純鎮が院使饗応を勤務した際に用務担当（新撰、九葉⑤）。後に江戸聞番兼近習番頭、先手者頭を歴任（新撰）。純鎮期。
隈鎮豊	通称東馬。最初、紀八郎、半八郎。最初、名前は包武。小字豊之進。名字は隈。妻は原智憲の娘。後妻は北条氏喜の娘。最初、五教館表生（新撰）。寛政六年（一七九四）、家督を相続し、中小姓、側詰兼士鉄砲支配、純鎮付、旗本長柄奉行、評定所出座江戸聞番を歴任（新撰）。享和三年（一八〇三）、旧名字隈を名乗る（新撰）。文化元年（一八〇四）、「文化武鑑」所収大村家系の編さんに関与（見聞）。同三年（一八〇六）、江戸聞番格、後に用人格（九葉③）。同五年（一八〇八）、後機備頭兼旗奉行を兼務（九葉③）。翌年にかけ、中老並、用人、後に中老に昇進（九

名前	履歴
隈鎮豊（続き）	葉③）。同七年（一八一〇）、中老のまま城代格となる（新撰は文政七年→誤、九葉③）。同年、後機備を主管（新撰、九葉③）。翌年、純鎮側近のまま家老となり、仮の五教館惣奉行を務める（新撰、九葉③）。同年、前藩主純鎮から名前の一字「鎮」を与えられ、鎮豊と名乗る（新撰）。同年、私領地一〇〇石を加増され家禄の合計三〇〇石余（新撰）。同九年（一八一二）、これまでの大村藩の長崎警備変遷史をまとめ長崎奉行土屋守直に提出し、奉行所に収録（九葉③）。同年、五教館学生の不学を訴え、覚五ヶ条を五教館監察に授ける（九葉③）。翌年、改制用掛となる（九葉③）。同十二年（一八一五）、家老及び一切諸役を辞職（新撰、九葉③）。同年、備頭兼後機武者奉行、後に備方、勝手方、武用方用掛を歴任（九葉③）。翌年、辞職（九葉③）。純鎮、純昌期。
包氏	通称外記。最初、袍之進。妻は大村公忠の娘。文政三年（一八二〇）、義兄包辰が実家へ戻る際に実父鎮豊の養嗣子となり、座列を城代嫡子次座と定められる（新撰、九葉④）。天保十四年（一八四三）、江戸へ赴き、広間番を務め、後に留守居添役となる（新撰）。翌天保十五（弘化元）年、後機者頭。オランダの公的使節長崎来航に際し、領内戸町村大浦を警固。同使節上陸の際、長崎奉行所立山役所門前を警備（新撰）。弘化二年（一八四五）、長崎聞番。嘉永六年（一八五三）、プチャーチン長崎来航以後、異国船来航に際し大浦、福田を数回警固（新撰、九葉⑤）。安政五年（一八五八）、城代兼旗本番頭（新撰、九葉⑤）。万延元年（一八六〇）、武具方、文久四（元治元）年（一八六四）、旗奉行（新撰）。家禄三〇〇石七斗（郷村）。居住地は外浦小路（郷村）。純昌、純顕、純熙期。
包寛	通称豊之進。妻は江頭顕穎の娘。嘉永二年（一八四九）、五教館表生となる（新撰）。安政元年（一八五四）、射術稽古仕立となる（新撰）。同四年（一八五七）、自得流稽古を命じられる（新撰）。万延元年（一八六〇）、久留米槍術皆伝免許（新撰）。文久三年（一八六三）、加番となる（新撰）。純熙期。

（盛山隆行）

引用・参考文献

「福田氏系譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之八上）…新撰

大村史談会編『九葉実録』第一、三～五冊（大村史談会　一九九四、九六～七）…九葉①、③、④、⑤

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

六. 小佐々氏系図

（凡例）＝養子

源扶義……（八代略）……佐々木時綱……（三代略）……小佐々満信……（三代略）……弾正（1）―弾正（2）―純俊

純正―弾正（3）―市右衛門―頼辰―辰昌＝頼利―辰直―頼敏＝頼雄―頼至―頼満＝頼俊＝頼慶

＝頼興―半次郎

名前	履歴
源扶義	参議左大弁。近江国（滋賀県）・河内国・安芸国・美作国などの国守を務める。近江源氏の祖（新撰）。
佐々木時綱	左衛門尉。旧名は九郎。従五位下対馬守（新撰）。
小佐々満信	太郎。四代前時綱の頃から近江国に居住。しかし満信は家臣に所領を横領され男島に蟄居。その後、肥前国彼杵郡（松浦郡が正）小佐々村に移り小佐々氏を名乗る（新撰）。
弾正（1）	妻は肥前国平戸松浦氏の娘。応仁年間（一四六七～六九）に小佐々村から彼杵郡多以良村（西海市大瀬戸町）に移住して城を構え、小峯に住む。多以良・七釜・中浦・松島・崎戸・蠣浦・江島・平島・三重村を領する。二町は大村のうちに、五町は彼杵村内。文明年間（一四六九～一四八七）に大村氏の家臣となる。文明六年（一四七四）に大村純伊が有馬氏に敗北した際、庶家の大村純直・純明は多以良に逃れ弾正の寄客となる。同十二年、大村純伊が加々良島から帰郡の際、兵船を出し大村純直・純明と共に川棚の三越で拝謁。即座に従軍し島田浜の戦いで軍功を挙げる（新撰）。純伊期。
弾正（2）	兄三郎が二三歳で戦死したために家督を相続する（新撰）。純前期。
純俊	弾正左衛門。永禄十二年（一五六九）に宮村領主大村純種が逆心の時、大村純忠は宮村葛峠での戦いに苦戦したため、大村源次郎純定と共に援軍出陣する。純俊は敵方の首級五つを取るが、純定と共に戦死する。墓は葛峠（新撰）。純忠期。
純正	弾正左衛門。永禄十二年（一五六九）に平戸の松浦氏が兵船二艘により外海の崎戸を襲った時、防戦する。家臣の常陸は敵将の荒木内蔵烝・末次隼人を射殺し、船中の兵を残らず捕らえる。この時一八歳。家督相続後の初めての手柄であり、大村純忠から感状を受ける。その後、純忠の命により主な外海衆から人質を出させて預る（新撰）。純忠期。
弾正（3）	母は大村純重の娘（新撰）。
市右衛門	初め弾正、吉之烝。小字又三郎。父の死去の時、幼少であったために減禄され、所領地は多以良村一村となる。その後の検地により九〇石余となり、後に家禄一〇〇石（新撰）。喜前、純頼、純信、純長期。
頼辰	新兵衛。初め四郎兵衛。先手者頭、近習番頭、手合役等を歴任。明暦三年（一六五七）の郡崩れの際、長崎奉行黒川氏の命により切支丹を捕らえ、吟味・処刑のため、佐賀・島原・平戸に送った時、平戸護送に当たる（新撰）。純長期。
辰昌	弾右衛門。妻は井手弥兵衛の娘。兄純正が江戸で早世したため

名前	履歴
頼利	に家督相続するが、中年にして病死（新撰）。九郎太夫。大村純成の四男。実母は大村頼直の娘。妻は小佐々弥惣兵衛の娘。徒士頭を務める。祖父の大村純勝が河内浦に新田四石を開発して頼利に与える。養家継承の時にこの分も加えて家禄とする（新撰）。純庸、純富期。
辰直	新兵衛。初め嘉内。小字土之助。妻は稲垣伯重の娘。脇備者頭、先手者頭を務める（新撰）。
頼敏	郡太。初め勇。小字久之助。使番を務める。幼年の頃から藩主純富の側近くに仕える。参勤に従い江戸で病死（新撰）。享保年中（一七一六～一七三六）、外浦小路に屋敷を構える（見聞）。純庸、純富期。
頼雄	勇右衛門。初め良八。小字土之助。稲垣伯明の次男。実母は熊野兼快の娘。妻は雄城景貞の娘。幼年時は隠居した旧藩主大村純庸の定詰として側近くに仕える。純富期に近習加番、諸士武術頭取、備方取次役、船奉行等を歴任する。純保期に宗門奉行・寺社奉行を務める（新撰）。純庸、純富、純保期。
頼至	重次郎。後に采右衛門。妻は原武郷の娘。先手長柄奉行を務める。寛政十二年（一八〇〇）に家督を譲る（新撰）。純鎮期。
頼満	静衛。初は勘一郎、頼則。小字土之助。妻は浅田鎮至の娘。寛政六年（一七九四）に参勤に従い江戸に赴き馬廻を務める。同九年に近習加番。同十二年には家督相続（新撰）。純鎮期。
頼俊	常之允。小佐々頼満の弟で頼可の長男。文政四年（一八二一）に実父頼可が家格・家禄没収されたが、先祖の弾正三代の忠孝により、祖父・頼満の名跡が取り立てられ旧地のうち三〇石をもらい、城下大給となる。同年、外浦小路から森園の藤崎氏宅へ屋敷替えとなる（新撰）。純昌期。
頼慶	仙之助。初め九十郎。内海豊郷の三男。妻は養父頼俊の妹。天保八年（一八三七）家督相続。同年無辺流槍術執行の命を受ける。同十一年仮に新徒士を務め、参勤に従い江戸に赴く。江戸藩邸において山本家から長年槍術を習い、槍術を伝えるよう命を受ける。天保十年（一八三九）、森園屋敷を返上して下久原へ屋敷替えとなる。同十二年、槍術の稽古に出精・上達したため時方金・復方金をもらう（新撰）。純顕期。
頼興	隼雄。初め千三郎。実は片山徹孝の二男。妻は北條兵三郎の叔母。弘化四年（一八四七）家督相続後、広間番に入る。剣術の稽古に出精し四回、方金をもらう。嘉永六年（一八五三）後機長柄組頭。後に後機与力、先手与力。異国船の長崎来航により数回福田警固に当たる。安政三年（一八五六）・四年に無念流立ち切り試合において時方金を拝領。同五年に馬廻に取り立てられ再び広間番に入る。文久元年（一八六一）剣術内頭取となり、久原に屋敷替え。同三年内稽古方に精励し内頭取、褒詞をもらう。同年、長崎非常手当として時津に出役し、元治元年（一八六四）には浦上でも同役を果たす（新撰）。大村城下両久原左列に屋敷を構え、家禄三〇石（郷村）。純熙期。

（久田松和則）

引用・参考文献

「小佐々氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之九）…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

七．朝長氏（宗家・浅田大学系）系図

朝長純次―純泰―純俊―純兵―純時＝純安―純盛―浅田前安―安昌＝長安―長令＝安生―鎮至
　　└昌明―元瑞―弘孝―由哀―俊光―安尚

（凡例）＝養子

名前	履歴
純次	右衛門太夫。朝長氏は、正暦五年（九九四）に大村に下向した藤原直澄に従った家臣七家の一家との伝承をもつ。その中興の祖（新撰）。
純泰	伊勢守（新撰）。
純俊	右衛門太夫。文明六年（一四七四）、有馬貴純との中岳合戦に敗北し、加々良島に敗走・潜居した大村純伊に従う。同十二年春、大村純伊の伊勢・多賀などの参宮に従う。同年八月、純伊、大村領を奪回して大村館に入る。この間の功績により恩領地として八町を下賜される（新撰）。純伊期。
純兵	伊勢守。号は、文通。武術に優れ、武者修行のため一二年間にわたり諸国を遍歴する。天文二年（一五三三）、大内義隆の家臣・鳥氏及び原田興種が彼杵上村を攻撃した際、大村尚純、庄式部と共に同村の重城を守り、敵を撃退し軍功を上げる。同七年秋、大村純前の上洛に大村純貞ら四人と共に従う（新撰）。純前期。
純時	右衛門太夫、純職（郷村②）。永禄七年（一五六四）、伊佐早（諫早）領主西郷氏の鈴田村塔ノ峯城攻撃の際、同城の後援として出陣したが、同地の万作畑で戦死。首は伊佐早の中井原に、胴は鈴田の六本松に埋められる（新撰）。純忠期。

名前	履歴
純安	伊勢守。初め新助。純時の実弟。妻は大村純忠の娘・小督。永禄五年（一五六二）、南蛮船の横瀬浦入港により南蛮貿易が始まると、純安と針尾伊賀守はその奉行を務める。同六年七月、武雄領主後藤貴明の大村野岳攻撃を撃退する。同七年、兄純時の戦死の時に嫡子右衛門太夫が幼少のため、大村純忠の命で兄の家督を継ぐ（新撰）。純忠期。
純盛	大学頭。妻は名前不詳ながら、元亀三年（一五七二）の三城七騎籠りに奮戦した五名の女性のうちの一人。その功績により土地六反をもらう。純盛も同合戦では城内に立て籠もって大手門を守り、後退する武雄の後藤勢を原口まで追撃し軍功を挙げる。天正二年（一五七四）の伊佐早西郷純堯の攻撃を境ノ尾に防戦する。同十年、大村純忠の四男純宣の佐賀龍造寺家への人質入りに従うが、龍造寺隆信の意に反して大村に帰る。隆信から難を逃れて島原に移る。同十二年、龍造寺隆信が島原で戦死したため大村に帰り家督を継ぐ。同十四年、早岐村外五ヵ村の郷民が松浦氏への帰属を望み井手平城に籠城する。その鎮圧に奮戦したが怪我を負い助けを得て陣所に帰る（新撰）。純忠期。
浅田前安	左門。初め朝長久助。妻は朝長純基の娘。文禄元年（一五九二）

名前	履歴
浅田前安（続き）	に朝鮮の役に出兵。同二年、明・朝鮮軍二〇万人が平壌に反撃し日本軍は撤退する中、本隊を支援し敵の追撃を阻止して軍功を挙げ、小西行長から戦功を称えられる。これによって領主大村喜前の名前の一字「前」と、家録三〇〇石をもらう。朝鮮陣中の軍功により豊臣家臣戸田勝隆から仕官を請われるが辞退する。同氏の田の一字をもらい姓を朝田と改め、後に浅田に変える。慶長四年（一五九九）、乾馬場から上小路に移る。慶長年間には大者頭となり江串村鉄砲組二六人を指揮する。元和六年（一六二〇）大村純信の跡目相続に伴い藩主の養育係となる。寛永七年（一六三〇）、大村純信の初めての参勤に従い、大村彦右衛門純勝に代わり江戸での役目を司る。老中土井利勝に拝謁し、貞宗作の腰刀を拝領する。寛永年中に家老職となり家禄六〇〇石、後に二男求馬之助に二〇〇石を分与し、四〇〇石となる（新撰）。喜前、純頼、純信期。
安昌	三郎兵衛。初め久助、又左門。小字辰之助。妻は千々石玄蕃の娘。寛永十九年（一六四二）家督を相続し城代となる。父前安の実母自證院の菩提のために、所領地戸根村に僧侶を招き庵室を構える。万治元年（一六五八）に同庵室を自證寺と称す。延宝五年（一六七七）に隠居して御城預かり、一〇人扶持となる（新撰）。元禄年中（一六八八～一七〇四）には上小路に屋敷を構える。表口の長さ三〇間（見聞）。純信、純長期。
長安	三郎兵衛。初め帯刀。小字兵九郎。平戸藩士熊沢正令の三男。実母は大村清助種純の息子・浅山純重の娘。妻は養父安昌の娘。継妻は福田長方の娘。病のため離別。三妻は安昌の次女。寛文二年（一六六二）、大村純長と平戸藩主との早岐での会見に従い、この時平戸藩主に大村藩士となることを請う。同三年、藩命による稲田長広の平戸到来に併せ、長広と共に大村に至り、浅田安昌の養子となる。延宝五年（一六七七）に家督相続し城代と

名前	履歴
長安（続き）	なり、藩主純長の名前の一字「長」をもらい、長安と名乗る。貞享元年（一六八四）藩主純鎮の用懸、かつ城代上座、評定所出座となる。同二年に家老職及び脇備士大将となる。母衣を作る技に優れ、差物として子孫に伝える。元禄十五年（一七〇二）藩主の参勤に従い、翌十六年江戸で病死する（新撰）。純長期。
長令	弥右衛門。小字弥十郎。母は福田長方の娘。妻は北條純氏の娘。継妻は沢島要信の娘。元禄十六年（一六〇三）に家督相続し、父長安が開発した新地七五石余は、亡父の願いにより弟忠八に分与する。同年城代となり藩主純長の名前の一字「長」をもらい、長令と名乗る。後に旗本頭、正徳四年（一七一四）家老職となり、藩主大村純庸の参勤に従う。翌五年に帰藩途中、駿河国藤枝（静岡県藤枝市）で病死（新撰）。純長、純尹、純庸期。
安生	左治馬。初め兵九郎、矢柄、主馬。小字武助。大村長二男。妻は養父長令の娘。継妻は村川長武の娘。正徳五年（一七一五）に家督相続。享保九年（一七二四）に側筒者頭、後に持筒者頭に転じる。元文三年（一七三八）に城代兼稽古奉行。後に旗本番頭も兼ねる。延享元年（一七四四）八月、福田に勤番中重病にかかり、藩主は山川周栄・村田元仙に治療を命じる（新撰）。享保年中（一七一六～四一）、上小路左列に屋敷を構える（見聞）。純庸期。
鎮至	大学。初め左門、安郷、帯刀、尚昭。小字弥太郎。妻は片山保明の養女（実は大村通明の娘）離縁。継妻は大村富敬の娘。延享元年（一七四四）に家督を相続したが、幼少のために叔父の浅田安周が陣代（後見役）を務める。寛延三年（一七四九）には叔父から家務を引き継ぐ。宝暦元年（一七五一）には城代となり、その後、備方諸稽古奉行、旗本番頭等を兼ねる。同七・八年、藩主の郡岳の狩りに先手士大将の仮役を拝命し藩主大村純鎮に従う。天明七年（一七八七）、家老職及び脇備士大将となり、藩

名前	履歴
鎮至（続き）	主純鎮の一字「鎮」をもらう。享和元年（一八〇一）、藩主から代々、城代次座・家老・家老上座に任じられる。同二年、先手士大将。文化元年（一八〇四）、五教館の養老礼の時、絹布紅裏の着物着用を許される（新撰）。純富、純保、純鎮期。
昌明	左門。初め千葉助、近義。小字亀之進。妻は大村鎮直の娘。安永五年（一七七六）、幼少の純鎮の素読相手、御能相手となる。後に近習加番となり五教館寮に務める。寛政三年（一七九一）側詰となり役禄四〇石をもらう。長袴着用を許され使番となる。享和三年（一八〇三）用人に転じ、文化元年（一八〇四）家督を相続し、千葉一郎所伝の砲術を一手に伝える周発番頭ともなる。同年、ロシア船（船長レザノフ）の長崎入港に伴い福田に出張・警備に当たる。同二年、家老職及び先手士大将に就く。同三年の参勤に陪従し、翌年の春、藩主純昌夫人の婚儀を司る。同五年、藩主純昌の名前の一字「昌」をもらい、昌明と名乗る（新撰）。純鎮、純昌期。
元瑞	綾之進。文化五年（一八〇八）家督を相続するが、幼少により叔父の弘孝が陣代（代務者）となる。純昌期。
弘孝	大学。初め織衛。隠居名唆萍。実は昌明の弟。妻は井石英彦の姉。文化五年（一八〇八）元瑞の陣代となる。同七年、元瑞が早世したために家督を相続する。同年に城代となり、その後旗本番頭、諸稽古奉行。武具方も兼ねる。同七・十年の幸天社・雄ヶ原練兵の時、旗本の騎兵と歩兵を率いて藩主に従う。同十一年に新地七石六升を開発し家禄四一三石五斗二升。弘化三年（一八四六）、フランス船の長崎入港時、御城番を務める（新撰）。純昌、純顕、純熙期。
弘孝（続き）由哀	左門。初め永二。酒井利脩の弟。妻は昌明の娘。継妻は隈包氏の姉。文化十一年（一八一四）に家督を相続し五教館寮に入る。その後、広間頭番、城代助を務める。文政五年（一八二二）、無勤のまま家禄二〇〇石を受ける（新撰）。純昌期。
俊光	大学。初め熊太郎、弘殷、千葉之助。小字満之進。実は弘孝の息子。母は井石氏の娘。妻は内海正閑の妹。家禄四一三石五斗二升。文政十年（一八二七）、家督を相続し五教館寮生、広間頭番、城代雇となる。天保十五年（一八四四）城代となる。同年のオランダ船出港及び弘化二年（一八四五）のイギリス船の長崎入港に際して福田に勤番。嘉永二年（一八四九）のアメリカ船の長崎入港及び嘉永六年（一八五三）のロシア船二度の長崎入港に際し士大将として福田警備に就く。文久二年（一八六二）に後機士大将、旗奉行（新撰）。屋敷は上小路左列の四番屋敷、表口長さ三三間五尺、家禄四一三石五斗二升（郷村①）。純昌、純顕、純熙期。
安尚	千葉助。初め弔作。妻は大村純顕の次女・於旒で大村純熙の養妹。嘉永七年（一八五四）に於菟丸、絢丸の伽番となる。安政三年（一八五六）五教館表生、後に寮生となる。同六年、前藩主純顕の娘と婚姻（新撰）。文久三年（一八六三）、改革派藩士らと同盟（1）。元治二年（一八六五）五教館斎長席（新撰）。慶応三年（一八六七）に勤王三十七士同盟へと発展（1）。純熙期。

（久田松和則）

註

（1）藤野　保「第四章幕末大村藩の基本体制と政治動向第二節第四項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

「朝長（浅田）氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之五上上）…新撰
藤野　保編『大村郷村記』第一、二巻（国書刊行会　一九八二）…郷村①、郷村②
藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

八．朝長氏（浅田弥次右衛門系）系図

純勝＝純武―純盛―純興―浅田正重―正利―寅正―正殿―正文―正也―正紹―正置―正源―正綏

（凡例）＝養子

名前	履歴
純勝	左馬助。豊後大友氏の館で弓馬の術を習得し、大村に帰領後は諸人に武術を伝えた（新撰）。
純武	七郎左衛門。朝長純兵の三男。妻は大村純重の娘。弓馬に優れ軍忠を尽くす（新撰）。
純盛	主税。大村純忠と伊佐早西郷氏との合戦の折、兄新左衛門と共に伊佐早口向島の大将を務めるなど、所々に軍功を挙げる。天正八年（一五八〇）、大村純忠と龍造寺隆信との和睦に際して主となり役目を果たす。また純忠への隠居を勧める。事情があって兄弟共に大村家を離れ、五島家の招きに応じて当地の客士となったが、その後、純盛は大村に戻る（新撰）。純忠期。
純興	次郎兵衛。妻は大村純広の娘。文禄元年（一五九二）、朝鮮出兵に一六歳で出陣し軍功を挙げ、帰国後に家禄二〇〇石をもらう。元和元年（一六一五）には大坂夏の陣に出陣し大者頭惣役を勤め、加増され家禄二五三石余となる（新撰）。喜前、純頼期。
浅田正重	弥次右衛門。隠居名甫斉。妻は朝長庄左衛門娘。後妻は庄與右衛門娘。三妻は稲田兵右衛門娘。四妻は烏山平之允の娘。父純興の死後、事情があって家断絶。その後、正重は新たに二〇〇石をもらい姓を本家と同じ浅田に改める。江戸において馬術を極めて家中に伝える。寛永十四年（一六三七）島原一揆での使節をはじめ、使番、持鎗奉行、江戸留守居を務める。隠居に当たり藩主純長から隠居名をもらう（新撰）。純信、純長期。
正利	忠兵衛。隠居名安入。母は庄氏。妻は長岡半右衛門の娘。部屋住中に近習を務め、郡代、惣役を歴任。延宝元年（一六七三）のイギリス商船リターン号の長崎入港の時に番手を務める。隠居に当たり藩主純長から隠居名をもらう（新撰）。純長期。
寅正	政右衛門。幼名政之允。母は長岡氏。妻は中村公光の娘。後妻は沢井定重の娘。部屋住中に近習を務める。大村純長・純尹・純庸の三代藩主に仕え、先手者頭、持筒者頭、目付番頭、用人、長崎聞番、備方、武具方等を歴任。参勤交代で四回江戸に赴く。新田九石余を開発し家禄二〇九石（新撰）。元禄年間（一六八八～一七〇四）には草場小路に屋敷を構え、表口長さ三三間。享保年間（一七一六～三六）も同所に構える（見聞）。純長、純尹、純庸期。
正殿	弥次右衛門。初め文四郎。浅田正定の長男。母は神浦正理の娘。

名前	履歴
正殷（続き）	妻は内海正辰の娘。後妻は村田敬道の娘。父正定が中年で没したため嫡孫として祖父寅正の家督を相続する。後に事情があって所領地を半減され、蔵米取りとなる。加番、中小姓、家士武術頭取、境目方見習、境目方頭役、使番、旗本長柄奉行、脇備者頭、再び境目方、先手者頭を兼ねて唐船打払役備方等を歴任する。宝暦四年（一七五四）参勤に従い江戸に赴き、宮原氏門弟となり日置流雪荷派の弓術を学ぶ（新撰）。純富、純保期。
正文	政右衛門。初め政太郎。妻は沢井定英の娘。宝暦十一年（一七六一）家督相続。同年新田三石四斗を開発し家禄二一二石六斗四升。同年に境目方見習、後に近習加番を務めるが、痘瘡に感染し死亡（新撰）。純鎮期。
正也	弥次右衛門。初め恵平。正文の実弟。兄正文が病死の時、その実子愛之助が幼少のために兄の家督を相続したが、若くして没する（新撰）。
正紹	汀。幼名愛之助。正文の長男、妻は浅田鎮至の娘。安永五年（一七七六）に浅田正也の養子となる。同九年近習加番。天明四年（一七八四）に参勤に従う。仮に中小姓、後に侍鉄砲支配、中小姓、大目付等を歴任（新撰）。
正置	兵庫。初め愛之助。妻は今村前道の娘。後妻は大村景常の娘。家禄二一二石六斗四升。寛政四年（一七九二）家督相続。文化五年（一八〇八）にフェートン号来航の時、長崎警備に就く。同六年に加番となり、その後、中小姓、近習、武術頭取、同十年の雄ヶ原練兵には当役使番として藩主に従う。参勤に従い四回江戸に赴く。使番、側詰、中小姓支配、旗本長柄奉行を歴任する（新撰）。純鎮、純昌期。
正源	弥次右衛門。初め源之允。妻は田嶋勝明の娘。後妻は雄城惟馨の娘。三妻は村部長英の妹。文政九年（一八二六）に五教館表生。後に定詰、中小姓。天保六年（一八三五）には家督相続し広間番となり、後役、馬廻を命じられ江戸に赴く。弘化四年（一八四七）脇備、長柄奉行、諸稽古頭取。嘉永元年（一八四八）には後機侍支配に転じ、近習加番となる。同五年には仮に後機大砲支配となり、アメリカ使節ペリーの浦賀来航に際しては脇備者頭格として領内戸町村大浦の警備に就く。安政二年（一八五五）に用人に転じ側筒者頭、治振軒用掛、同六年持鎗奉行として藩主近くに仕える。万延元年（一八六〇）には幼君絢丸付を命じられ、参勤に従い江戸に赴く（新撰）。寛政六年（一七九四）、正置の代から大村城下外浦小路の左列屋敷に住む。家禄二一二石六斗四升（郷村）。純昌、純顕、純熙期。
正綏	重太郎。母は雄城氏。嘉永二年（一八四九）に大村純熙の養嗣子・於菟丸の素読相手となり、翌年伽番。同四年五教館表生。同六年無念流仕立。安政三年（一八五六）には願いにより場所見習として江戸に出府し翌年帰藩。万延元年（一八六〇）神道無念流執行を命じられる（新撰）。慶応二年（一八六六）、勤王三十七士同盟に抗し、反改革派同盟に加盟(1)。純熙期。

（久田松和則）

註

(1) 藤野　保「第四章幕末大村藩の基本体制と政治動向第二節第四項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

「朝長（浅田）氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之五上下）…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

九．大村氏（宇多田太左衛門系）系図

純之―純常―信勝―勝次―長本―徳英―徳祇―徳斯―徳元―徳芳＝徳通―徳興―徳昭

（凡例）＝養子

名前	履歴
純之	通称若狭守。大村純次の三男。元亀三年（一五七二）、三城七騎籠での活躍により純忠から扇を下賜。扇を家紋とする。正月に大村領主と対面時の飲食を許される。また、その家格を純忠から付与（新撰）。純忠期。
純常	通称角左衛門。法名道丸。壮年から尾張織田家に仕えたが、天正十年（一五八二）、本能寺の変後、大村へ帰る（新撰）。喜前に仕える（新撰）。文禄元年（一五九二）、朝鮮出兵に従軍（新撰）。嫡子頼勝を呼び寄せ、家禄を加増され合計一〇〇石となる（新撰）。嫡子頼勝を呼び寄せ、頼勝が一三歳のとき家督を譲る（新撰）。家禄一〇〇石（新撰）。純忠、喜前、純頼期。
信勝	通称太左衛門。宇多兵蔵、名前を頼勝、純教と名乗る（新撰、郷村②）。母は大村純辰の娘。妻は大村（渋江小鹿島）公種の娘。脇家老（中老）を務め、純頼から名前の一字「頼」を与えられ、頼勝と名乗る（新撰）。高野山西明院へ行き、純頼の位牌を作り、生前の厚意を感謝し三年間供養し、松千代（三代藩主純信）の命で大村へ帰る（新撰）。脇家老兼鉄砲大将となり、徒士頭も務める。純信から名前の一字「信」を与えられ、信勝と改める（新撰）。四代藩主純長期に藩最初の持筒者頭となる（新撰）。家禄一八〇石（新撰）。喜前、純頼、純信、純長期。
勝次	通称治左衛門。妻は神浦正通の娘。若くして病死（新撰）。純長期。
長本	通称太左衛門。長左衛門本次。妻は雄城純盛の娘。父勝次が若くして亡くなり、祖父信勝も没した一三歳の時、家督を相続（新撰）。後に使番となり、純長から名前の一字「長」を与えられ、長本と改める（新撰）。純長期。
徳英	通称音門。初め三郎太夫勝良。小字長太郎。隠居後、音門旦一之と改め、快酔とも号す。妻は野澤長俊の娘。代々、外浦小路に居住（郷村①、見聞）。一三歳で家督を相続し、後に近習番頭、大目付等歴任（新撰）。元禄十五年（一七〇二）、「郷村記」編さんの撰者の一人となる（九葉①）。正徳三年（一七一三）、罷免され流罪（九葉①）。その後隠居出家したが、復職を命じられ、音門快酔と名乗り、元締役を務める（新撰）。享保四年（一七一九）、純庸、元締役としての出張（大坂助松屋へ藩の借財申請）精励を褒め、毎年衣装代金三枚を下賜（九葉①）。同年、元締仕役（職務は元締役同）となり、音門旦と名乗る（九葉①、新撰）。純長、純庸期。

名前	履歴
徳祇	通称太左衛門。また、縫殿右衛門。最初、三郎太夫徳高。小字段之助。熊野兼徳の三男。実母は熊野兼本の娘。妻は養父大村徳英の娘。後妻、三妻は共に堀勝広の娘。四妻は神近玄立の娘。享保元年（一七一六）、元締方見習（九葉①）。同三年（一七一八）頃、元締役（九葉①）。長崎聞番兼先手番頭を命じられ、座列が元締役次座となる（九葉①）。同十一年（一七二六）、外浦小路から上小路に屋敷替（郷村①）。元文四年（一七三九）、上小路から外浦小路に屋敷を替え、幕末まで同居住（郷村①）。寛保三年（一七四三）、境奉行として三重村と佐賀藩深堀領の藩境論争に関わるが中途で逃避（九葉②）。家禄一九八石余（新撰）。純尹、純庸、純富、純保期。
徳鄰	通称亘人。最初、縫殿右衛門徳宣。幼名覚十郎。妻は富永種春の娘。後妻は北条長氏の娘。副加番として純富に仕え、のち純保付中小姓となる（新撰）。延享三年（一七四六）、父が死去し江戸で家督を相続。中小姓兼務の先手長柄奉行（新撰）。寛延二年（一七四九）、純保の大村入りに併せて使番兼側詰に専念（新撰、九葉②）。同年、近習番頭となる（九葉②）。その後、中小姓支配、脇備者頭、先手番頭を歴任（新撰）。純富、純保期。
徳元	通称亘。最初、安之進。妻は片山祇文の娘。後妻は大村逸右衛門の叔母。宝暦十二年（一七六二）、家督相続（新撰）。文化元年（一八〇四）、レザノフ長崎来航に際し、者頭として幕府領梅ヶ崎の使節客館内を警衛（新撰、九葉③）。同六年（一八〇九）、正月の鉄砲撃ち始め式で第六側筒隊を率いる（九葉③）。翌年、昊天宮での練兵の際、純鎮に従い、弓、鉄砲隊を統帥（新撰）。その後、旗本長柄奉行等を歴任（新撰）。純鎮、純昌期。
徳芳	通称左馬之進。最初、里之助。妻は大村鎮友の伯母で後に離縁。二人の兄の早世により、嗣子となる（新撰）。文化六年（一八〇九）、純鎮の側詰となり、座列は側筒者頭次席（新撰）。同九年（一八一二）、純鎮の付役用人格となり、側詰を兼務。家督相続（新撰、九葉③）。同年、用人（新撰）。同十一年（一八一四）、後機軍奉行、次いで備方（九葉③）。翌年、江戸での勤務実情を理由に罷免され、隠居謹慎を命じられる（新撰、九葉③）。純鎮、純昌期。
徳芳（続き）	
徳通	通称主馬。最初、周八郎。田川隆品の二男。妻は養父徳芳の娘。後妻は大村勝範の叔母。家禄一九八石六斗一升（新撰）。牧野家を相続していたが、藩命により徳芳の養子となる（新撰）。文化七年（一八一〇）、中小姓（新撰）。同十二年（一八一五）、家督相続時に中小姓を辞める（新撰、九葉③）。一刀流頭取、備駒立御手伝、長崎唐人屋敷番所詰等を歴任し、再び中小姓となる（新撰）。後に中小姓兼務のまま後機士支配、使番（新撰）。その後、純顕の側詰兼中小姓支配、近習兼脇備者頭、後機者頭、近習番頭兼先手者頭（新撰）。天保十四年（一八四三）、純昌の娘訓（松平乗懿正室）付として江戸へ数回赴く（新撰、九葉別）。純昌、純顕期。
徳興	通称太左衛門。最初、兵之充。妻は大村勝範の姉で後に離縁。後妻は大島友信の妹で後に離縁。三妻は田川隆善の叔母。天保十五（弘化元）年（一八四四）、家督相続（新撰）。弘化三年（一八四六）、側詰供頭（新撰）。文久元年（一八六一）、側用人兼質素方用懸（新撰）。文久三年（一八六三）、のちの勤王三十七士同盟に加盟（1）。元治元年（一八六四）、中老（九葉⑤）。慶応元年（一八六五）、福岡藩で政変（乙丑の獄）が起こり、佐幕派政権樹立構築に際し、調停の副使として福岡へ赴く（九葉⑤）。同年、家老兼脇備士大将（九葉⑤）。同三年、藩主純熙から名前一字「熙」を与えられ、熙徳と名乗る（九葉⑤）。純昌、純顕、純熙期。
徳昭	通称麟三郎。母は大村勝範の娘。嘉永三年（一八五〇）、藩主家

名前	履歴
徳昭（続き）	で漢文素読の相手役を務める（新撰）。安政元年（一八五四）、純熙の養嗣子純一の学友となり、五教館表日勤生となる（新撰）。同五年（一八五八）、神道無念流剣術の指南役（新撰）。文久元年（一八六一）、藩命により藩士へ同剣術の指南を行い、同試合の用務を務める（新撰）。翌年、中小姓（新撰）。純熙期。

（盛山隆行）

註

（1）藤野　保「第四章幕末大村藩の基本体制と政治動向第二節第二～四項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

「大村氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之二）…新撰

大村史談会編『九葉実録』第一～五冊、別冊（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤、別

藤野　保編『大村郷村記』第一、二巻（国書刊行会　一九八二）…郷村①、②

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

一〇．大村氏（隼人・靭負・直江系）系図

純正―純政＝長貞―忠通＝長祐―保勝―勝英＝昌勝―勝興―勝範＝誠之進

（凡例）＝養子

名前	履歴
純正	通称隼人。名字を堀内とも名乗る。小佐々兵部の次男。母は朝長純安の娘。妻は大村純勝の娘。実父没後、母が純勝と再婚し純正は養子となる（新撰）。慶長年間（一五九六～一六一五）末、純頼期に者頭一二人の一人（堀内隼人）として、家禄二二〇石六斗七升三合を下賜され三浦村給人四〇人を属せられる（見聞）。元和年間（一六一五～二四）、大者頭に列した後、城代を務める（新撰）。江戸滞在中に江戸家老に任命されたが、命令が届く三日前に病死（新撰）。純忠、喜前、純頼、純信、純長期。
純政	通称忠左衛門。初め勝正。慶安三年（一六五〇）、純長（四代藩主）の養子入りに際し、大村藩重臣の一人として伊丹家に署名血判する（九葉①、見聞）。城代、家老を歴任（新撰）。喜前、純頼、純信、純長期。

名前	履歴
長貞	通称靭負または小左衛門。初め長興。隠居名独心。小笠原氏家臣島立弥右衛門の子。実母は三好家次の娘で純長の叔母。妻は純政の娘。慶安三年（一六五〇）、純長（四代藩主）の養子入りに際し、大村藩重臣の一人として伊丹家に署名血判（九葉①、見聞）。延宝五年（一六七七）、旗本組となり城番を務める（九葉①）。貞享四年（一六八七）、大村長行の二男彦十郎（長祐）を養子とするよう命じられる（九葉①、新撰）。城代兼旗奉行を務める（新撰）。純信、純長、期。
忠通	通称忠左衛門。小字彦之助、伊織。天和三年（一六八三）、藩命で家督を相続し、座列は父と同じ（新撰）。貞享四年（一六八七）、痘瘡に罹り病死。純長期。
長祐	通称勘解由、初め勘解由左衛門。幼名彦十郎。大村長行の二男。実母は針尾長納の娘。妻は三好利安の娘。貞享四年（一六八七）、藩命で家督を相続し、座列が城代席となる（新撰、九葉①）。正徳四年（一七一四）、評定所見習（九葉①）。後、城代兼旗本組支配を務め、家老兼脇備部将兼先手部将（新撰）。享保二年（一七一七）、家老（九葉①）。六代将軍徳川家宣が五代将軍綱吉の養子となる際と紀伊藩主徳川吉宗（後八代将軍）が家宣の後見人となった際の慶賀の使節を務める（新撰）。外浦小路居住（見聞）。純長、純尹、純庸、純富期。
保勝	通称木工（本）。小字甚吉郎。初め名前、勝儀。妻は純庸の娘。後妻は三好利直の娘。元文三年（一七三八）、純富の妹橘子（雪）と婚姻（九葉②、別）。翌年、用人となる（新撰）。寛保三年（一七四三）、家督相続（九葉②）。その後城代兼旗本番頭（新撰）。寛延二年（一七四九）、銃卒を率い、豊前大里（北九州市）で純保を出迎える（九葉②）。宝暦七年（一七五七）、家老兼脇備士（部）将（新撰、九葉②）。同年、純保から名前の一字「保」を与えられ、保勝と名乗る（新撰、九葉②）。明和元年（一七六四）、江戸で病死（新撰、九葉②）。純富、純保、純鎮期。
勝英	通称隼人。初め早之助。母は三好利直の娘。妻は三好利房の娘。宝暦十二年（一七六二）、近習加番（新撰）。明和元年（一七六四）、家督を相続し、近習加番のまま、座列を取立家老嫡子とする（新撰）。この間、中小姓勤務中、江戸参勤に従う（新撰）。同年、城代（新撰、九葉②）。安永四年（一七七五）、大村藩士の武術監督に命じられる（新撰）。翌年、旗本番頭（新撰）。天明七年（一七八七）、旗奉行（新撰）。この間、オランダ船長崎入港に際し、長崎や福田で勤番（新撰）。寛政二年（一七九〇）、治振軒で一刀流剣術や各武技を演習する際に奉行を務める（九葉②）。純保、純鎮期。
昌勝	通称直江。初め友孝。大村富敬の三男。妻は養父勝英の娘。寛政十一年（一七九九）、家督相続後、用人兼藩主側近となり、享和元年（一八〇一）、元締役兼作事奉行（新撰、九葉②）。翌年、家老兼脇備士大将となり、五教館惣奉行兼務（新撰、九葉②）。享和三年（一八〇三）、江戸で両替商と藩借財について協議するが不調（九葉③）。文化元年（一八〇四）、純昌から名前の一字「昌」を与えられ、昌勝と名乗る（新撰、九葉③）。翌年、勝手掛として藩財政倹約の用務を主任（九葉③）。同四年（一八〇七）、作略方用掛（藩政改革刷新担当）（九葉③）。同六年（一八〇九）、藩財政窮乏のため、領民へ加勢銀を収めるよう命じる（九葉③）。純鎮、純昌期。
勝興	通称隼人。小字龍太郎。妻は大村昌春の姉。文化元年（一八〇四）、藩主家側近として素読相手を務める（新撰）。同七年（一八一〇）、家督相続（新撰）。同十一年（一八一四）、代々居住の外浦小路から本小路に居所を移し幕末まで居住（新撰、九葉③、郷村）。同年、城代（新撰、九葉③）。文政五年（一八二二）、旗本兼番頭及び武具支配（新撰）。同八年（一八二五）、城内見分時に蛇

名前	履歴
勝興（続き）	の目傘を使用したため、純昌に叱責される（九葉④）。天保五年（一八三四）、病気のため、城代を辞職（九葉④）。純鎮、純昌期。
勝範	通称靭負。小字百乙。妻は大村頭朝の妹。家禄三一五石四斗八升（新撰、郷村）。天保五年（一八三四）、家督相続後、五教館表生及び寮生（新撰）。同十五年（一八四四）、オランダ使節船の長崎来航に際し、先手者頭として藩領戸町村大浦へ赴き、船

名前	履歴
勝興（続き）	で警固（新撰）。嘉永五年（一八五二）、旗本長柄奉行を務める（新撰）。安政五年（一八五八）、長崎聞番（新撰）。元治元年（一八六四）、用人（九葉⑤）。慶応三年（一八六七）、江戸屋敷用人として京都へ行き、孝明天皇から純熙への勅諚を受け取り、大村へ帰る（九葉⑤）。純昌、純顕、純熙期。
誠之進	大村（神浦）快次郎（与）の弟。

（盛山隆行）

引用・参考文献

「大村氏系譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之二）…新撰

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

大村史談会編『九葉実録』第一～五冊、別冊（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤、別

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

一一．針尾氏系図

針尾周防守―伊賀守―九左衛門―主馬丞―四郎右衛門―長納―高納＝幸納―保納＝頼格―昌納

昌盛＝政納＝寿納―土亀之進

（凡例）＝養子

児玉姓針尾氏の元祖は村上天皇（九二六～六七）の子具平親王子孫で赤松則景二男である。則景二男氏行が奥平を名字として代々、上野国奥平郷（群馬県）を領した。氏行は武蔵七党児玉党の後裔で則景の養子か。その支流が肥前国松浦郡針尾島（佐世保市）の地頭職となり、針尾に名字を改めたが詳細不明。周防守を針尾家系の初代とする。奥平家と針尾家の家紋はともに軍配団扇である（新撰①針）。

名前	履歴
周防守	肥前国松浦郡針尾島の地頭として一万石を領地としたが、時代不明（新撰①針）。
伊賀守	針尾島を領し佐志方城を居城とする（新撰①針）。たびたび平戸領主松浦氏と争い敗れ、永禄年間（一五五八～七〇）、大村純忠の家臣となる（新撰①針）。永禄五年（一五六二）、横瀬浦に南蛮船が入港し、交易（新撰①針は交易期間を五年間）。伊賀守は朝長純安と共に交易を監視（新撰①針）。同九年（一五六六）、武雄領主後藤貴明が野岳に出陣した際、伊賀守は貴明と内通するが、攻撃は失敗。再度純忠家臣になる（新撰①針、郷村②）。元亀五年（一五七四）、純忠、矢上村（長崎市）を下賜（新撰①針）。純忠期。
九左衛門	妻は大村純清の娘。朝鮮出兵に際し喜前に従う。旗奉行を務め、大村家家紋付の冑を与えられる。法名道本（新撰①針）。喜前期。
主馬丞	能茂と名乗る（見聞）。妻は大村右京の娘。喜前、家禄三〇〇石を下賜（新撰①針）。慶長四年（一五九九）、本小路に居住。同地（玖島二丁目）は寛文六年（一六六六）に会所となる（郷村①）。慶長十九年（一六一四）、上小路へ転居し、幕末まで同家の屋敷となる（郷村①）。元和元年（一六一五）、大坂夏の陣に際し、純頼に従い軍船を周防国上関（山口県）まで進め、大坂落城を聞く。主馬丞は江戸へ行き、留守居役を三年間務め同地で病死（新撰①針）。江戸在勤中、幕府と他藩との遣り取りや他藩江戸屋敷の情報を大村へ逐次報告（見聞）。純頼期。
四郎右衛門	母は大村氏の娘。妻は内海茂左衛門の娘。父主馬丞が病死した時、幼少だったため、祖父九左衛門が復職（新撰①針）。家禄三〇〇石は幼少の四郎右衛門に過分なため、一〇〇石を藩へ返上、成人後に再下賜（新撰①針）。江戸で勤務し、中年で病死。純頼、純信期。
長納	通称九郎兵衛。妻は大村政直の娘。父が病死したため八歳で家督を相続。幼少のため、外祖父（母の父）内海茂左衛門が代理を務める（新撰①針）。成人後、藩に仕え、寛永十五年（一六三八）、島原一揆に際して原城へ赴く（新撰①針）。純長から名前一字「長」を与えられ、長納と名乗る（新撰①針）。寛文年間（一六六一～七三）、新田開発により家禄二三〇石（新撰①針）。寛文十二年（一六七二）、城代並となる（九葉①）。延宝元年（一六七三）、リターン号長崎来航に際し番代として警固（見聞）。貞享三年（一六八六）、領内検地の際、家禄二〇石が加増され、合計二五〇石（新撰①針）。持筒者頭、旗奉行を歴任（新撰①針）。純信、純長期。
高納	通称九左衛門。初め縫殿助。妻は大村公広の娘。家督相続後、使番となる（新撰①針）。明暦三年（一六五七）、郡崩れの罪人の一部を佐賀藩及び島原藩の送致引率（九葉①、見聞）。天和二年（一六八二）、安田与総左衛門等と「郷村記」の編さんを開始（九葉①）。元禄六年（一六九三）、中小姓支配（頭）先手者頭となる。後に用人（初奉行役）、中老を歴任（新撰①針、九葉①）。純尹期に家老兼脇備士大将となり、私領地二〇石を加増され、合計二九六石余となる（新撰①針）。その後、先手士大将となり、享保二～一〇年（一七一七～二五）、左先鋒隊を預かる（新撰①針、九葉①）。純長、純尹、純庸期。
幸納	通称範右衛門。高納の実弟。妻は北条純氏の娘。家督相続前から純尹の側近となり、中小姓を務める（新撰①針）。後に用人、中老、持槍奉行などを務め、家禄とは別に四〇石を下賜（新撰①針）。正徳三年（一七一三）、純尹死去に際し、朝長美次と共に供養のため宝塔を高野山に建立（現存）（新撰①針・九葉①）。享保十年（一七二五）、家督を相続し、家老兼左脇備士大将兼船手組支配を務め、翼隊を預かる（新撰①針、九葉①）。同十七年（一七三二）まで江戸で家老として勤務し、同地で病死（新撰①

名前	履歴
保納	針、九葉②）。純尹、純庸、純富期。 通称半左衛門。初め和納と名乗る。妻は純庸の娘峯（後に久と改名）。享保十七年（一七三二）、家督を相続し、家老嫡子の身分を与えられる（新撰①針）。宝暦七年（一七五七）、家老兼右脇備士大将となり、藩境防備を専務（新撰①針、九葉②）。純保から名前一字「保」を与えられ、保納と名乗る（新撰①針、九葉②）。同年、先手左備士大将に昇進（新撰①針、九葉②）。安永九年（一七八〇）、「評定所要録」を校正（九葉②）。天明七年（一七八七）、永年の功績により私領一〇〇石を加増され、家禄の合計四〇〇石余（新撰①針、九葉②）。享和元年（一八〇一）、業務精励を賞され藩主家親類格となる（新撰①針、九葉②）。純富、純保、純鎮、純昌期。
頼格	通称縫殿助、大村、庄家では佳奈江。初め広納と名乗る。大村富脩の四男で大村鎮直の実弟。母は北条長氏の娘で針尾高納の養女。妻は大村富敬の娘。最初、針尾保納の養子となり、宝暦五年（一七五五）、中小姓となり、後に加番を務める（新撰①針、新撰④）。明和四年（一七六七）、用人、後に持槍奉行などを歴任（新撰①針、九葉②）。安永六年（一七七七）、事情により用人、持槍奉行を免職され、再び実家の大村家へ帰る（新撰①針、新撰③、新撰④）。純保、純鎮、純昌期。
昌納	通称斎宮、八郎、後に大衛。鉈五郎、方納と名乗る。妻は浅田鎮至の娘。後妻は北条氏喜の伯母。頼格の長男で、天明四年（一七八四）、義祖父保納の養子となり中小姓を務める（新撰①針）。享和二年（一八〇二）、家督を相続し家老兼脇備左士大将となり、家老兼務のまま右脇備士大将などを歴任。文化元年（一八〇四）、純昌から名前一字「昌」を与えられ、昌納と名乗る（新撰①針、九葉③）。翌年、新地開発し、加増され、家禄の合計四〇六石八斗六升（新撰）。同五年（一八〇八）、長崎警備専任の家老となり大番頭兼務（九葉③）。フェートン号長崎来航に際し、大村藩の警備総責任者として本陣詰家老として尽力（九葉③）。純鎮、純昌期。
昌盛	通称九左衛門。新三郎と名乗り、杢之丞とも呼称。庄頼格の五男で針尾保納の義孫。妻は養父北条氏慶の娘。寛政四年（一七九二）、一刀流剣術修行を命じられる（新撰①北）。同十年（一七九八）、北条氏慶の養子となり、翌年、家督相続し出仕（新撰①北、針、新撰④）。文化十一年（一八一四）、藩命で用人兼持筒者頭のまま、実兄針尾昌納の養嗣子となる（新撰①針、北、九葉③）。同十三年（一八一六）、家老兼後機士大将となり、俸禄二〇〇石を下賜（新撰①針、九葉③）。文政元年（一八一八）、家督を相続し、純昌から名前の一字「昌」を与えられ、昌盛と名乗り、脇備士大将となる（新撰①針、九葉④）。同三年（一八二〇）、藩命で再度北条家へ戻り家督を相続し、改めて家老に就く。後機士大将は兼務（新撰①針、北、九葉④）。純鎮、純昌、純顕期。
政納	通称典女。熊之丞と名乗る。針尾昌納の嫡子。母は浅田鎮至の娘。妻は純鎮の娘珍子（昵）深澤勝陟の娘。後妻は大村包生の娘（新撰①針、②、九葉②、③、別）。家禄四〇六石八斗六升（新撰①針）。文化十一年（一八一四）、藩命により隈鎮豊の養子となり、典女という字を下賜され通称とする（新撰①針、②、九葉③、④）。同年、珍子と結婚し、両家嫡子格の身分を与えられる（新撰②、九葉②、③）。文政元年（一八一八）、城代となり、同三年（一八二〇）、藩命で、城代勤務のまま実家針尾家に戻り家督を相続（新撰①針、②、九葉④）。天保二年（一八三一）、旗本番頭備方を兼務し、同十年（一八三九）、旗奉行を兼ねる（新撰①針、九葉④）。純昌、純顕期。
寿納	通称九左衛門。大衛と名乗る。稲垣武伯の二男。妻は大村友彰

名前	履歴
寿納（続き）	の姉。後妻は北条氏藩の姉。嘉永二年（一八四九）、家督相続（新撰①針）。幕末開港後の長崎警備主導（新撰①針、九葉⑤）。文久二年（一八六二）、城代兼旗本番頭（新撰①針、九葉⑤）。翌年、改革派の藩士らが同盟を結び、慶応三年（一八六七）、勤王三十七士同盟へ発展、その盟主となる（1）。元治元年（一八六四）、保守派重臣が中枢から排除され、改革派重臣として家老兼脇備士大将に就任（新撰①針、九葉⑤）（1）。同二（慶応元）年（一八六五）、大村藩正使として孝明天皇に謁見、勅答書を授けられ

名前	履歴
寿納（続き）	る（九葉⑤）。慶応二年（一八六六）藩主純熙から名前の一字「熙」を与えられ、熙納と名乗る（九葉⑤）。翌年、正月の城中謡初の帰りに襲撃され負傷。熙納、事件を終息させるよう藩士を鼓舞（九葉⑤）。その後、大村騒動に発展（1）。一連の騒動により辞職を願い出るが不許可（九葉⑤）。同年、王政復古の大号令に際し、純熙らと共に上洛（九葉⑤）。家禄四〇六石八斗六升（郷村）。純顕、純熙期。
土亀之進	母は北条氏の娘。

（盛山隆行）

註

（1）藤野　保「第四章幕末大村藩の基本体制と政治動向第一節第一、三、四項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

「針尾氏家譜」、「北条氏系譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之七）…新撰①針、北

「福田・隈氏家譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之八上）…新撰②

「松浦大村氏家譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之四）…新撰③

「庄氏家譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之六十三）…新撰④

大村史談会編『九葉実録』第一～五、別冊（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤、別

藤野　保編『大村郷村記』第一、二巻（国書刊行会　一九八二）…郷村①、②

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

（二一代略）……橘公義―渋江公村……（九代略）……公勢―公親―公師―大村公種―公頼―公広―長時―公政

公隆―公賀―公兵―公伴―昌邦―顕忠―公爵―公達―公尚―虎之助

（凡例）＝養子

名前	履歴
橘公義	通称薩摩守。また十郎、乙王丸とも名乗る。聖武天皇が左大臣葛城王諸兄に聖武天皇が橘姓を下賜する（新撰）。公義は嘉禎二年（一二三六）、肥前国杵島郡長島庄一〇〇〇町の地頭職に任じられ、翌年伊予国から下向。潮見山（武雄市）に要害を構え居城とする（新撰）。
渋江公村	通称渋江左衛門尉。名字を渋江に改める（新撰）。
公勢	通称薩摩守。また右馬頭、弥次郎とも名乗る。妻は武雄領主後藤職明の娘。近在の村々を攻め取り肥前国杵島郡多久比都富（日鼓）山（八幡岳）を居城とする（新撰）。文明年間（一四六九～八七）、大村純伊の伊勢神宮参拝に際し、近江国（滋賀県）逢坂宿で初めて純伊に謁見し大村帰還について話し合う（新撰）。同十二年（一四八〇）、純伊帰還に際し、一族中村公秋を大将とし純伊期。
公親	通称下野守。本領を後藤氏に攻め取られ、壱岐や佐賀に流浪（新撰）。
公師	通称豊後守。または太郎と名乗る。妻は山鹿重行の娘。後妻は原直景の妹。肥後国山鹿（熊本県山鹿市）に住んだが、永禄五年（一五六二）、後藤貴明の招きに応じ、潮見山城、塩田島山城、同籾岳等を守る（新撰）。天正七年（一五七九）、貴明の隙に乗じ、武雄を退き大村に至り純忠に仕える（新撰）。純忠の命で貴明の押さえとして波佐見村岳山城を守る（新撰）。隠居後は波多三河守に仕える（新撰）。波多家滅亡後、松浦信実（鎮信弟）に仕え、二男公茂を平戸に留め、波佐見村に来住（新撰）。純前、純忠、喜前期。
公師（続き）	
大村公種	通称大村十右衛門。妻は純忠の娘。家禄四〇〇石と大村を永代名字に下賜される。文禄元年（一五九二）、朝鮮出兵に喜前とともに従軍し、軍功。元和六年（一六二〇）、大村純信が幕府から大坂城石壁修繕の命を受けた際、奉行を務める（新撰）。純頼、純信期。
公頼	通称式部。小字作十郎。妻は喜前の娘。家禄合計六〇〇石となり、家老（新撰）。
公広	通称式部。小字虎松丸。妻は横瀬純政の娘。慶安三年（一六五〇）、母が喜前の娘であったため、三代藩主純信の養子候補に挙がる（九葉①、別）。正徳三年（一七一三）、城代（新撰、九葉①）。純長、純尹、純庸期。
長時	通称外記。大村純心の次男。実母は大村公頼の娘。妻は養父公広の娘。延宝三年（一六七四）、純長の武部八幡神社参詣に騎馬で随従（郷村）。同五年（一六七七）、旗本組（九葉①）。後、城代兼左脇備士大将を務める（新撰）。元禄九年（一六九六）、隊長を兼務し城代上班に昇進（九葉①）。代々、本小路に居住（郷村）。純長期。
公政	通称源左衛門。小字松之助。妻は針尾長納の娘。城代を務める

名前	履歴
	（新撰）。純庸期。
公隆	通称外記。丹下。大村友晴の二男。実母は大村長興の娘。妻は公政の娘。正徳四年（一七一四）、公政隠居により、家督相続。城代、旗本頭を務める（新撰）。享保五年（一七二〇）、備帳の主管を大村十郎兵衛と交代（九葉①）。同十七年（一七三二）、用人に命じられ、江戸で庶務を習得（九葉②）。同二十年（一七三五）、江戸屋敷での勤務不良により罷免の上、家禄を没収し、実家の私領中山村（西海市西彼町）に幽閉。親戚交流を停止させられ、浪人となる（新撰、九葉①、②）。純庸、純富期。
公賀	通称辰之助。義兄公隆が浪人となり、祖父長時の名跡として蔵米一五〇石を下賜される（新撰、九葉②）。
公兵	通称長左衛門。小字与吉。北条氏成の二男。実母は村松長宣の娘。妻は公隆の娘。使番、大目付、近習番頭、脇備者頭、用人を歴任（新撰）。また、加番備方、江戸屋敷留守詰、幕府への使者を務める（新撰）。伊勢神宮、諸神社の藩主代参等を勤務。元文三年（一七三八）、本小路から上久原へ屋敷替え（郷村①）。寛延三年（一七五〇）、諫早一揆に際し、藩命により者頭として藩境の鈴田口警固を務める（新撰、九葉②）。宝暦四年（一七五四）、用人（九葉②）。その後江戸で病死（新撰）。純富、純保期。
公伴	通称長左衛門。兵之助、また良次郎と名乗る。妻は大村徳直の娘で公伴没後、帰家。近習加番を家督相続後も務める（新撰）。安永六年（一七七七）、先手長柄奉行となり、後に士鉄砲支配。翌年、九代藩主純鎮の江戸参勤に従い、江戸屋敷で仮の大目付を務めるが同地で病死（新撰）。純保、純鎮期。
昌邦	通称右膳。荘蔵と名乗る。名前は最初公哉。北条氏英の五男。実母は澤井定包の娘。妻は佐々木直居の妹。後妻は稲垣武伯の叔母。安永八年（一七七九）、家督を相続。近習加番、大目付を歴任（新撰）。享和元年（一八〇一）、先祖所縁の波佐見村に私

名前	履歴
昌邦（続き）	領地三〇〇石を下賜され、前職兼務のまま城代兼旗奉行（新撰、九葉②）。同年、上久原から本小路に屋敷替（新撰、郷村①）。文化四年（一八〇七）、家老兼脇備士大将となり、同六年（一八〇九）、純昌から名前の一字「昌」を与えられ、昌邦と名乗る（新撰、九葉③）。同八年（一八一一）、先手士大将（新撰、九葉③）。同十二年（一八一五）、右脇備士大将（九葉③）。翌年、五教館用懸（掛）に命じられ、人材教育を第一に教育改革を主導（新撰、九葉③、④）。純鎮、純昌期。
顕忠	通称次郎左衛門。初之充。官兵衛。最初名前を公忠。妻は深澤勝陟の娘。天保十一年（一八四〇）、家督を相続し、先手者頭を命じられる（新撰、九葉④）。翌年、用人となり、同十三年（一八四二）、家老兼脇備士大将（新撰、九葉④）。弘化元年（一八四四）、純顕から名前の一字「顕」を与えられ、顕忠と名乗る（九葉④、新撰は天保十三年）。同三年（一八四六）、フランス船三隻長崎来航に際し、守備隊長として藩領戸町村大浦を警備（新撰、九葉④）。同五年（一八五二）、練兵を主導（新撰）。翌年、ロシア使節プチャーチン長崎来航に際し、侍大将として戸町村大浦を警備し、その後長崎蔵屋敷で勤務（新撰、九葉⑤）。純昌、純顕、純熙期。
公爵	通称秀松。文政十一年（一八二八）、藩主家の素読相手役に命じられる（新撰）。翌年、純昌の子伊織（純顕）、弾正（阿部正備）の学友となり、同十三年（一八三〇）、五教館表生、定詰に進級（新撰）。天保五年（一八三四）、祖父昌邦の家督を相続（新撰）。同十年（一八三九）、広間頭番入に命じられる（新撰）。翌年、嫡子を命じられる（新撰）。後多病により返上（新撰、九葉④）。純昌、純顕期。
公達	通称駒次郎。天保十四年（一八四三）、兄公爵が嫡子を返上したのち相続（新撰）。弘化二年（一八四五）、五教館表生、後定詰（新

名前	履歴
公達（続き）	撰）。嘉永元年（一八四八）、近習加番となる（新撰）。同四年（一八五一）、病気により家督を返上（新撰）。純昌、純顕期。
公尚	通称翁助、後三郎、後に小鹿島右衛門。名前は正隆。稲田昌廉の四男。妻は三根行優の娘。渡辺清の娘筆子の前夫果は二男。家禄三五〇石（郷村①）。嘉永四年（一八五一）、顕忠の養子となり、翌年、帰還し五教館学頭となり、同年、中小姓を務める（新撰）。純熙の江戸参勤に従う（新撰）。安政三年（一八五六）、再度五教館学頭（新撰）。翌年、五教館監察兼先手者頭となる（新撰）。同年、家禄を相続（新撰）。文久二年（一八六二）、側用人（九葉⑤）。慶応元年（一八六五）、中老（九葉⑤）。同三年（一八六七）、京都で他藩士と接触し国事に奔走（九葉⑤）。同年、王政復古の大号令に際し、純熙上洛（新撰）。公尚は長崎の状況を大村へ報告（新撰）。後、京都大坂の政情偵察（九葉⑤）。明治元年（一八六八）、総督として北伐軍大村藩隊を率いて、出羽国（山形・秋田県）へ出征し羽州戦争で軍功（1）。長男虎之助は早世。次男は庄蔵（果）。三男は卯十（新撰）。純顕、純熙期。
虎之助	早世（新撰）。

（盛山隆行）

註

（1）盛山隆行「第一章維新政権の成立と大村藩第一節第四項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第四巻近代編　大村市　二〇一六）

引用・参考文献

「渋江氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之十五上）…新撰

大村史談会編『九葉実録』第一～五冊、別冊（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤、別

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

二三　北条氏系図

（二四代略）……長氏……（二代略）……氏光―氏則―氏平＝氏信―純氏―長信＝長氏―保氏＝氏知＝氏喜
　　└氏擒―氏恒＝兵三郎

（凡例）＝養子

名前	履歴
長氏	通称伊勢新九郎。後の北条早雲。妹は今川義忠（義元祖父）の妻（新撰）。子に氏綱、孫に氏康（新撰）。
氏光	早雲の曾孫。通称北条右衛門佐。足柄城主。兄は氏政。弟は上杉謙信の養子景虎。妹は武田勝頼の妻（新撰）。
氏則	通称北条内匠。天正十八年（一五九〇）、一二歳の時、豊臣秀吉の小田原征伐で落城後、母や妹と共に京都大徳寺に蟄居（新撰）。後年、豊臣秀頼重臣で慶長二十年（一六一五）の大坂夏の陣で戦死した木村重成の後妻を妻とした（新撰）。
氏平	通称北条右衛門佐。母は木村重成の後妻。妻は小笠原内膳の娘。播磨明石（龍野が正）藩主小笠原長次の招きに応じ、家禄七〇〇石を下賜され居候（新撰）。三好家次（坂崎出羽守直行弟）の二男作左衛門を養子とする（新撰）。寛永九年（一六三二）長次が明石から豊前中津（大分県）へ国替えの時に従うが事情があって中津を退き江戸に住む（新撰）。
氏信	通称北条作左衛門。三好家次の二男。四代藩主純長の伯父。妻は養父氏平の娘。純長実母が氏信の実姉であったため、慶安四年（一六四一）、大村家臣となる（新撰、九葉①、見聞）。家老兼脇備士大将となり、純長の命令で練兵の際は藩主代役（御床几代）を務める（新撰、九葉①）。後に先手左備士大将（新撰、九葉①）。延宝元年（一六七三）、リターン号長崎来航。出港の際、警備のため、陣頭指揮（九葉①）。同四年（一六七六）、藩主家貧困につき、大村弥五左衛門等と協議し、藩士各人へ同年の家禄二・三割を献納させる（九葉①）。純長期。
純氏	通称主計。新十郎と名乗る。妻は大村純心の娘。延宝八年（一六八〇）、家督相続（新撰）。天和元年（一六八一）、家老兼先手左備士大将を務める（新撰、九葉①）。貞享四年（一六八七）、死去（九葉①）。純長期。
長信	通称源五郎。最初、伊勢松。父純氏は家禄五〇〇石のうち、一五〇石を弟氏成へ配分したので、長信は残り三五〇石を相続（新撰）。幼少期は叔父氏成が後見（新撰）。壮年になって多病となり、大村長氏を養子として隠居（新撰）。
長氏	通称作左衛門、新兵衛、彦三郎。大村長行の三男。実母は針尾長納の娘。妻は長信の妹。後妻は針尾高納の養女で大村公広の娘。元文三年（一七三八）、外浦小路に屋敷を下賜されたが、火災で屋敷が焼失し役目免除（郷村、九葉②）。城代、旗本頭となり、家老脇備部将を務める（新撰）。寛延三年（一七五〇）、先手左隊士大将（部将）（新撰、九葉②）。宝暦二年（一七五二）、純保の江戸参勤に際し、長氏の屋敷で出立式（九葉②）。純富、純保、純鎮期。
保氏（氏章）	通称作左衛門。瀬左衛門、源兵衛、左平。初め名前を氏章。妻は富永保種の娘。後妻は三好利房の娘、離縁。家督相続前から純富の側近となり、近習加番、中小姓を務める（新撰）。純保期に再び加番。後に近習番頭（新撰）。宝暦七年（一七五七）用人（新撰、九葉②）。同九年（一七五九）、家老兼脇備士大将（部将）（新撰、九葉②）。翌年、純保から名前の一字「保」を与えられ、保氏と改める（新撰、九葉②）。同十一年（一七六一）、幕府九州巡見使の大村下向に際し、大村宿で接見（九葉②）。純富、純保、純鎮期。
氏知	通称主鈴。大村富脩の八男。妻は養父保氏の娘。安永八年（一七七九）、家督相続（新撰）。天明六年（一七八六）、脇備左となり、純鎮の郡岳狩猟の際に一二〇人の藩士を率いて従い、純鎮が仕留めた鹿を受領（九葉②、⑤、見聞）。その後、中小姓、使番、先手者頭（新撰）。翌年、純鎮の側詰、側筒者頭、（側）用人を務める（新撰、九葉②）。同年、徳川家斉の第一二代将軍職宣下において、純鎮が公家衆の接待役を務めた際、用務担当（見聞）。文化十年（一八一三）、隠居を命じられる（新撰、九葉③）。純鎮、

名前	履歴
氏喜	純昌期。 通称外衛。陽三郎。保氏の長男。母は三好利房の娘。妻は大村鎮友の伯母。大村勝英の養子となっていたが、北条氏知の隠居により子がいなかったために実家へ帰る（新撰）。寛政元年（一七八九）、家督相続（新撰）。享和元年（一八〇一）、藩命で外浦小路から岩船へ屋敷替（新撰、郷村）。文化元年（一八〇四）、レザノフが長崎に来航し、幕府領梅ヶ崎へ上陸した際に、藩境の戸町村大浦で、防火の備え（新撰、見聞）。同十一年（一八一四）、藩命で岩船から小姓小路へ屋敷替（新撰、郷村）。文政四年（一八二一）、藩命で小姓小路から外浦小路へ屋敷替（新撰、九葉④、郷村）。後、長崎聞番先手者頭（新撰）。同七年（一八二四）、本小路の明屋敷（空家）を下賜（新撰、郷村）。純鎮、純昌期。
氏擒	通称司書。守太郎。妻は大村昌春の妹。家禄三六二石三斗。文政十三（天保元）年（一八三〇）、家督相続。同年、本小路から外浦小路へ屋敷替（新撰、郷村）。同地は天保二年（一八三一）、五教館、治振軒となる（郷村）。同年、武術頭取、同八年（一八三七）、馬廻、同十三年（一八四二）、長崎聞番となる（新撰）。弘化三年（一八四六）、脇備者頭格、翌年、先手者頭（新撰）。純昌、純顕期。
氏恒	通称雅之進。妻は福田頼房の娘、離縁。弘化四年（一八四七）、家督相続（新撰）。嘉永五年（一八五二）、五教館表生、後に射術仕立（新撰）。安政二年（一八五五）、広間番入を命じられる（新撰）。同三年（一八五六）、射術修行を命じられ方金下賜（新撰）。純顕、純熙期。
兵三郎	江頭顕穎の四男。万延元年（一八六〇）、家督を相続するが、文久二年（一八六一）、早世（新撰）。純熙期。

（盛山隆行）

引用・参考文献

「北条氏系譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之七）…新撰

大村史談会編『九葉実録』第一～五（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

一四　深澤氏系図

中橋時成……（五代略）……掛橋公貞―公房―土橋公祐―中尾公清―深澤勝清＝勝幸―勝直―勝行―勝昌

―勝豊＝勝倚―勝孝＝勝賢―勝憲＝勝寧＝勝継

（凡例）＝養子

名前	履歴
中橋時成	通称中橋六郎。橘公義の四男。深澤氏の祖（新撰）。
掛橋公貞	通称掛橋六郎左衛門。中橋公成の長男。享禄年間（一五二八～三二）、周防（山口県）大内氏の侵攻を避け波佐見村長尾（波佐見町永尾郷）に移住（新撰）。純伊、純前期。
公房	通称甲斐守。天文十四年（一五四五）、大村純前長男又八郎（貫明）が武雄領主後藤純明の養子となる際、武雄へ従う（新撰）。天正十三年（一五八五）、武雄から退き、波佐見村井石（井石郷）に居住。家禄五三石余（新撰）。純前、純忠期。
土橋公祐	通称土橋舎人。
中尾公清	通称中尾土佐。波佐見村中尾（中尾郷）に居住し、名字を中尾と改める（新撰）。
深澤勝清	通称深澤儀太夫。また浅井太郎左衛門。初め中尾次左衛門と名乗る。隠居名浄雲。妻は内海政勝の娘。最初、武術を教授していたが捕鯨技術を体得し、捕鯨の利益を藩へ献上（新撰）。正保四年（一六四七）、深澤組を率いて捕鯨開始（郷村⑥）。純長から深澤の名字を与えられる（新撰）。大村宿本陣の用務は代々深澤家が務める。慶安三年（一六五〇）、円融寺建立に先立ち金二八〇〇両を献金。長安寺の本堂・石塀・鐘を寄進。宝円寺の堂宇を改修（1）。万治三年（一六六〇）、新田開発を要望。寛文元年（一六六一）、郡村野岳に堤（野岳湖）を築き、新田を拓く（新撰、九葉①、郷村②）。同三年（一六六三）、野岳堤竣工（九葉①、郷村②）。これにより約四〇〇〇石の新田を開発（1）。同年没（1）。前船津浦の辻に御影石の大きな石祠があり、銘文に「常寂院青山浄雲居士　俗名深澤儀太夫勝清　寛文三癸卯年三月十七日」（郷村）。純信、純長期。
勝幸	通称儀太夫。初め浅井庄兵衛、後角左衛門と名乗る。隠居名真海。勝清の実弟。妻は根岸直久の娘。寛文七年（一六六七）、長与村に皿山開窯を請願（九葉①）。長与焼、後に長与三彩を焼く。延宝六年（一六七八）五島魚目、貞享元年（一六八四）、壱岐勝本で網組捕鯨を開始（郷村⑥）。網組捕鯨の創始は勝幸発案説と紀伊熊野での体得説がある（郷村⑥）。延宝七年（一六七九）、郡村今富本蔵に堤を築き新田開発（見聞）。翌年、江戸外桜田備前町の水野氏宅地一七八三坪余を購入して藩に献上（見聞）。同年、藩が借銀返済のため、毎年銀三〇貫目を支出するよう命じるが、捕鯨不漁のため銀七〇貫目余は借銀負担（1）。貞享二年（一六八五）、捕鯨不漁により運上銀献上不能（九葉①）。純頼、純信、純長期。
勝直	通称儀太夫。また弥次兵衛、角左衛門。初め浅井庄兵衛と名乗る。貞享四年（一六八七）、永年の功績を認められ、子の一人を許可し藩士となり、子の勝貞を深澤新家として分家させる（新撰）。元禄十一年（一六九八）、火事で類焼した長崎蔵屋敷の再建費総額四三貫五〇〇目のうち、銀三〇貫を拠出（見聞）。宝永

名前	履歴
勝直（続き）	元年（一七〇四）、鐘及び水時計を献上。快行院を撞鐘場とした（九葉①）。純長、純尹、純庸期。
勝行	通称儀太夫。初め浅井弥次兵衛と名乗る。
勝昌	通称儀太夫。初め浅井弥次兵衛と名乗る。妻は長崎町人の石本氏の娘。享保二年（一七一七）、藩命により深澤家を相続（九葉①）。同九年（一七二四）、特命により藩へ御用銀二五〇貫目を献上（新撰、九葉②）。純庸、純富期。
勝豊	通称金五郎。初め浅井金五郎と名乗る。享保十六年（一七三一）、先代から漁猟がなく本陣役を辞退するが、藩は不可とし、永代五〇人扶持を下賜（新撰、九葉②）(1)。純富、純保期。
勝倚	通称儀太夫。初め甚四郎、伝之充と名乗る。勝豊の実弟。妻は浅井氏の娘。元文四年（一七三九）、村津三郎右衛門から略奪された深澤家伝家の宝刀「菊代治国」が戻る（九葉②）。宝暦十一年（一七六一）、深澤儀平次とともに、武部八幡神社の願主となり、常夜燈と神馬を献上（九葉⑤）。純鎮の能の相手役を務め、寛政五年（一七九三）、帯刀を許可される（新撰）。純富、純保、純鎮期。
勝孝	通称弥次兵衛。初め万次郎と名乗る。妻は深澤与六郎の娘。大坂で病死（新撰）。
勝賢	通称儀太夫。初め勇吉と名乗る。深澤儀平次の二男。妻は養父勝孝の娘。寛政九年（一七九七）、純鎮の能の相手役を務める（新撰）。純鎮期。

名前	履歴
勝憲	通称太郎三郎。妻は江頭周達の娘。蔵米五〇人扶持（新撰）。文化三年（一八〇六）、藩士に列するよう請願し、藩は、代々の功績と旧家を理由に特別に藩士に入れ、城下給人末席とする。最初座列を広間番、後に旗本組（新撰）。これにより深澤三家が藩士に列し本家分家併せて七家全てが藩士となる。同九年（一八一二）、純昌の能の相手役となる（新撰）。文政二年（一八一九）、藩内の鬢付油に関する一切の株を受領（新撰、九葉④）。純昌期。
勝寧	通称亀三郎。後儀太夫。深澤勝徳の子。妻は一瀬忠興の娘で後に離縁。後妻は松田倫政の妹。　蔵米五〇人扶持（新撰）。実家在住中の文政八年（一八二五）、藩命により礼法を習う（新撰）。翌年、家督相続（新撰）。天保四年（一八三三）、福岡藩主黒田斉溥の用達を務め、同家紋入正装を下賜される（新撰）。同十三年（一八四二）、礼法頭取となり、以後、格外町年寄、旗本取次、年番を数回務める（新撰）。安政四年（一八五七）、魔除け退散の弓の儀式の用務（畳目方（ひきめかた））を務める（新撰）。純昌、純顕、純熙期。
勝継	通称兵太郎。田島勝朋の二男。妻は養父勝寧の妹。天保三年（一八三二）、五教館表生となり、以後純昌の能の相手役を務める（新撰）。安政二年（一八五五）、神道無念流剣術の精励を賞され目録を下賜される（新撰）。後、与力席となる。同六年（一八五九）、家督相続（新撰）。文久四（元治元）年（一八六三）、城下大給稽古頭取（新撰）。純顕、純熙期。

（盛山隆行）

註

(1) 柴多一雄「第二章藩政の推移と改革第一、二節」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

「深澤氏系譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之十五中）…新撰
藤野　保編『大村郷村記』第一、二、六巻（国書刊行会　一九八二）…郷村①、②、⑥
大村史談会編『九葉実録』第一～五冊、別冊（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤、別
藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

一五．稲田氏系図

田﨑越前―善右衛門―兵右衛門―正成―稲田長広―正常―正武―正瑞―昌廉―熙正＝正厚

（凡例）＝養子

名前	履歴
田﨑越前	代々、彼杵村樋口（東彼杵町三根郷）に居住し、初め樋口氏を名乗る（新撰）。
善右衛門	家禄二三石余（新撰）。天正十四年（一五八六）、大村純忠に反抗した長与村領主長与純一の居城浜城攻撃に軍功（新撰）。純忠期。
兵右衛門	二代藩主純頼期に馬廻となる。家禄四〇石（新撰）。城下の田町（東本町）に移住（新撰）。喜前、純頼期。
正成	通称九左衛門。田意斎と号した。妻は富永前治の娘。後妻は長崎摠左右衛門の娘。島原一揆後、島原藩領への百姓移住に同家下人喜蔵が含まれる（1）。慶安三年（一六五〇）、純長（四代藩主）養子に際し、大村藩重臣の一人（田﨑九左衛門）として伊丹家への誓書に署名血判する（九葉①、見聞）。純信、純長期。
稲田長広	通称藤左衛門。妻は浅田正重の娘。郡奉行、用人等を歴任（新撰）。家禄一三〇石（新撰）。翌年、純長から名前の一字「長」と稲田の名字を与えられ、長広と名乗る（新撰）。明暦三年（一六五七）、奉行の一人として純長の江戸参勤に従う（見聞）。延宝元年（一六七三）、リターン号長崎来航に際し、長崎で用務担当（見聞）。天和元年（一六八一）、出納奉行兼務として臨時の郡代職（九葉①）。郡代在職中の事件を詳細に記録し、また年貢検査前に予定の年貢高（歳入）を上申するよう命じられる（九葉①）。同年、郡代解任、出納奉行に専念（九葉①）。純信、純長期。
正常	通称曽右衛門。初め兵五郎と名乗る。妻は小方相蔵の娘、父長広の私領分地三〇石を相続し大給となる（新撰）。元禄十五年（一七〇二）、「郷村記」編さんの筆役（九葉①）。宝永四年（一七〇七）以来九年間、組頭勤務時に出納会計作りを行う（九葉①）。純長、純尹、純庸期。
正武	通称利左衛門。妻は小方嘉太夫の娘で小方儀昭の養女。勘定組頭、元締付（新撰）。その後、元締方吟味役、先手目付使役（新撰）。寛延三年（一七五〇）、元締役に任命され、職禄一〇〇石高（九葉②）。家禄は四〇石（新撰）。同年、屋敷を岩船の岩崎栄運と交換し、幕末まで岩船居住（九葉②、郷村）。宝暦八年（一七五八）、罪により、元締役を免職、馬廻となる（新撰、九葉②）。同十年

名前	履歴
正瑞	（一七六〇）、死去（新撰）。純富、純保期。 通称又左衛門。妻は片山祇文の娘。宝暦八年（一七五八）正月、純保に初謁見し、家督相続（新撰）。同十四（明和元）年（一七六四）、藩へ出仕（新撰）。安永十一年（一七八一）、大目付（新撰）。享和三年（一八〇三）、用人兼側役（新撰）。文化三年（一八〇六）、家禄一〇〇石三斗余（新撰）。翌年、用人兼側筒者頭、さらに中老（九葉③、新撰では大納戸頭役も兼）、作略方用掛（藩政改革刷新担当）（九葉③）。同五年（一八〇八）、大納戸頭役（九葉③）。同年、フェートン号長崎来航に際し、大村藩本陣詰用人を務める（九葉③）。墓碑は玖島二丁目の乗廻墓地内の稲田家墓地。純保、純鎮、純昌期。
昌康	通称又左衛門、極人、左貫。小字は金吾。名前は正康。妻は稲垣孝伯の娘。後妻は渋江公順の妹。文化六年（一八〇九）、家督相続（新撰）。翌年、大目付格側目付（新撰、九葉③）。同八年（一八一一）、用人兼側役（新撰）。同十二年（一八一五）、側用人（九葉③）。文政五年（一八二二）、中老兼務（九葉④、新撰）。翌年、江島、平島両島の境界を定める（九葉④）。天保二年（一八三一）、家老兼後機士大将となり、家禄二〇〇石三斗三升（九葉④、新撰）。翌年、純昌から名前の一字「昌」を与えられ、昌康と名乗る（新撰、九葉④）。同十三年（一八四二）、先手士大将兼仮の後機士大将となり、家禄二五〇石三斗三升（新撰、九葉④）。墓碑は玖島二丁目の乗廻墓地内の稲田家墓地。純昌、純顕、純熙期。
熙正	通称中衛。鵬之充。名前は正儀。妻は大村徳通の娘。長崎聞番

名前	履歴
熙正（続き）	兼近習番頭となり、天保十三年（一八四二）、用人に昇進（新撰）。弘化四年（一八四七）、持筒者頭兼側用人（新撰）。嘉永七（安政元）年（一八五四）、幕府から藩へ領地朱印状の下賜に先立ち領内総石高の調査を命じられる（新撰）。安政二年（一八五五）家督相続し、家老兼脇備士大将となる（九葉⑤、新撰）。同五年（一八五八）、純熙から名前の一字「熙」を与えられ、熙正と名乗る（新撰、九葉⑤）。元治元年（一八六四）、先手士大将（九葉⑤）。同年、大村宿で江頭とともに福岡藩家老黒田山城と会談し、福岡両藩の同盟を約束（九葉⑤）。慶応三年（一八六七）、大村騒動の加害者を渡辺昇と共に探索。捕縛の方法を協議（九葉⑤）。家禄二五〇石三斗三升（郷村）。墓碑は玖島二丁目の乗廻墓地内の稲田家墓地。純昌、純顕、純熙期。
正厚	通称東馬。才八郎、又左衛門。名前は後に熙孚。熙正の弟。妻は横山氏繁の娘で横山寅一郎の姉。文久二年（一八六二）、近習番頭（九葉⑤、新撰）。翌年、改革派藩士らと同盟。慶応三年（一八六七）に勤王三十七士同盟へと発展（2）。元治元年（一八六四）、用人（九葉⑤）。同年、渡辺昇らと共に福岡へ赴き、同藩家老黒田播磨らと会談し、大村、福岡両藩の同盟成立（九葉⑤）。慶応元年（一八六五）、純熙の上洛に際し、江頭隼之助等と共に従い、御所で諸公家に貢物を献上（九葉⑤）。同三年（一八六七）、大村騒動発生に際し事件解決を主導（九葉⑤）。明治三年（一八七〇）、大村藩権大参事として藩内の神社改正を主導（九葉⑤）。墓碑は西海市西彼町小迎郷の稲田家墓地にある。純昌、純顕、純熙期。

（盛山隆行）

註

（1）半田隆夫「第一章幕藩体制の成立と大村藩第三節第二項四」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

（2）藤野　保「第四章幕末大村藩の基本体制と政治動向第二節第一～四項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

「稲田氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之二十二）…新撰

大村史談会編『九葉実録』第一～五冊、別冊（大村史談会　一九九四～九七）…九葉①、②、③、④、⑤、別

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

二　特記略系図

特記略系図　凡例

諸氏系図　凡例に拠る。

一．三城七騎籠りの七氏系図

元亀三年（一五七二）七月晦日、後藤貴明が平戸の松浦氏、伊佐早西郷氏と結託して、一五〇〇の兵をもって三城城を攻撃。この時、城内の純忠の家臣は大村純辰、朝長安芸守純基、朝長大学頭純盛、今道遠江守純周、宮原常陸助純房、渡辺伝弥九純綱、藤崎出雲守純久の七騎、そのほかの男衆四五人、女衆・人質二七人であったが、勝利した。

一．大村山城守純辰

純辰は、二．大村氏（彦右衛門系）系図参照。

引用・参考文献

「大村氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之二）…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

二．朝長大学頭純盛

純盛は、七．朝長氏（宗家・浅田大学系）系図参照。

三．朝長安芸守純基

朝長純次―純泰…（三代略）…純安―純盛
　　└純基

名前	履歴
純基	朝長伊勢守純安の二男。惣役を務める。三城七騎籠りでは、朝長純盛と共に一五人の兵を率いて大手門を守り、抜群の軍功を挙げる。その功績により大村の水田と波佐見の太郎丸の地に合わせて六町の所領を加増される。同年、三城七騎籠りの勝利を

名前	履歴
純基（続き）	記念して、水田に八幡宮を、太郎丸には観世音の祠を建てる。天正八年（一五八〇）、龍造寺との和睦を拒み、隆信から難を逃れて有馬に身を寄せる。同十二年に隆信は島原攻めの合戦で戦死したため、有馬から戻り旧領を安堵（新撰・郷村）。純忠期。

引用・参考文献

「朝長（浅田）氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之五上上）…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

四．宮原常陸助純房

宮原貴勝―暨房―前勝―純房―前重

名前	履歴
純房	旧名は式部。小字権助、妻は森種秋の娘。家禄一七〇石、惣役を務める。永禄九年（一五六六）、大村純忠が後藤貴明と鳥越伊里宇で戦った時、槍をもって軍功があった槍の達人。三城七騎籠りでは、純忠が死を覚悟した酒宴を張った時、二人静の舞手を務める。戦いでは純忠の側を固め、勝利の後には軍功が賞されて、純忠の名前の一字「純」をもらい純房と名乗る。天正八年（一五八〇）、伊佐早西郷純堯の境ノ尾攻めに際しても純忠に従い活躍。同八年、純忠と龍造寺の和睦に際して、純忠二男の大村純宣を証人（人質）として差し出す。文禄元年（一五九二）、大村喜前の朝鮮出兵に際しては陣屋を守るが出火する。その責めを受け牢人となり長崎へ移るが、後に大村に戻り扶持米取となる（新撰・郷村）。純忠、喜前期。

引用・参考文献

「宮原氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之十二）…新撰
藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

五．藤﨑出雲守純久

藤﨑某―純久―三郎兵衛

名前	履歴
純久	久出津（杭出津）の藤﨑出口に住む。家禄一五〇石。三城七騎籠りでは純忠の側近として本丸の守備に就く。その軍功により純忠の名前の一字「純」をもらい、純久と名乗る。嫡家が断絶したために隠居して一〇石をもらう。後に三男の久太に家禄を譲る（新撰・郷村）。純忠期。

引用・参考文献

「藤崎氏系譜」(大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之十)…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第一巻(国書刊行会　一九八二)…郷村

六、渡辺伝弥九純綱

渡辺俊綱―氏綱―純綱―純武

名前	履歴
純綱	花山氏とも称す。三城七騎籠りでは、純忠の側近として本丸の守備に就き敵を撃退する。その功績により純忠の名前の一字「純」をもらい純綱と名乗る。天正十七年(一五八九)冬、大村喜前の天草本土城攻めに従軍し、凱旋の報を先に伝えんと、大村純忠に先立ち大村に帰る途中、この日降雪ひどく鈴田の山中で凍死する(新撰)。純忠期。子孫には、渡辺清と昇がいる。

引用・参考文献

「渡辺氏系譜」(大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之十一)…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第一巻(国書刊行会　一九八二)…郷村

七、今道近江守純周(1)

大村純郷―純直―今道純利―純経―純清―純周―純勝

名前	履歴
純周	初め左京。妻は一瀬忠氏の娘。家禄六町、父純清は多病により早く隠居して軍功が少なかったため、純周を立てたかったが、幼少のために実現できなかった。一四歳の時、自分の逆修供養を行ってから、大村家の側近として戦場に従った。天文年間(一五三二～五五)、大村純前と後藤純明との藤津合戦に一六歳で初陣し、敵方の大木舎会の首級を討ち取り、その功で褒美の刀

名前	履歴
純周（続き）	を拝領。永禄九年（一五六六）後藤貴明が野岳に侵攻した時、純忠の側において不意打ちをかけて勝利した。三城七騎籠りでは、搦手小城口の守りに就く。家臣二人を萱瀬村に差し向け援軍を触れ廻らせた。これにより、萱瀬衆一六人が登城。形勢逆転し、西郷勢を追う中、純周の家臣永田千兵衛が立石口で大将尾和谷軍兵衛の首を討ち取った。天正二年（一五七四）三月、西郷氏の萱瀬村攻撃に当たっては、純忠軍の先鋒となり敵将の尾和谷弥三郎と雑兵百余人を討取。同年春、大村氏家臣の遠藤千右衛門が逆心して早岐井手平城に籠城した際には、副将として遠藤氏を攻め落とす。この時、佐志方左馬助の首級を討取。

名前	履歴
純周（続き）	天正五年（一五七七）には龍造寺氏が萱瀬に、松浦道可が川棚村三越に攻め入り、両者の敵の防御は不可能と判断した純忠は、仲介役に渋江公師を立てて松浦氏との和議を望み、純周がその使者として遣わされ和議を結ぶことに成功。天正年間（一五七三～一五九二）、波佐見の福田丹後が反逆した時、純周の妹を丹後の弟・薩摩に嫁がせることによって和睦を結び解決。天正八年（一五八〇）には龍造寺氏との和睦を巡り、反対者から襲われ長崎に潜居。天正十三年（一五八五）隆信が島原で戦死の後、純忠から呼び戻され側近に戻る（新撰・郷村）。純忠期。

（久田松和則）

註

（1）「郷村記」などの記録は今道近江守純近とあるが、新撰士系録では「純周」と記される。三城七騎籠りの事蹟から同一人物と思われ、ここでは「新撰士系録」に従い「純周」とした。

引用・参考文献

「今道氏系譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之一）…新撰
藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

二．鈴田越前守純種（道意）系図

鈴田純種―純則

名前	履歴
純種	号は道意。妻は大村純治の娘。鈴田村を所領地とし同所に住む。大村純治の遺言により大村純伊幼年の間は後見役を務める。文明六年（一四七四）、大村純伊と有馬貴純との萱瀬中岳合戦の時、純種は逆心して純伊の大敗を招く。同十二年八月十五日に大村純伊が加々良島から帰領の時、先の逆心を悔やむ。有馬家臣皆吉左馬の首を討ち取り、有馬勢は大村純次のもとに降り、純種は郡村竹松で純伊に拝謁（新撰）。鈴田村は古くは鈴田純種が領地とし、岩松の城に居住したと伝えられる（郷村）。純治、純伊期。
純種（続き）	

（久田松和則）

引用・参考文献

「鈴田氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之十二）…新撰

藤野　保編『大村郷村記』第二巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

三．千葉（飯笹）平六左衛門胤重（卜枕）系図

（二七代略）…胤茂―胤継―胤正―胤次―胤重（卜枕）―胤一

名前	履歴
胤重	平六左衛門。旧名：助右衛門。母は宮原前重の娘。妻は一瀬九郎兵衛の娘。徒士を務め、家禄三〇石。万治元年（一六五八）、評定所筆役（新撰）。寛文四年（一六六四）、胤重の願いで純長から放虎原の銭壺から百本松までの野原二五町余を与えられ、収量三五石余の田畑を開墾（新撰、九葉、郷村）。同五年（一六六五）、大曲から聖宝寺までの間、長崎街道を現在の国道三四号の位置に移し、その中間に並松宿を設置。また、大筒組を組織し同地に居宅を構え、宿に桜、桃、杉等を植える（新撰、郷村、九葉）。同七年（一六六七）、放虎原の道下に三六町の畑を開墾し、後に数千本の杉（建築用）・櫨（はぜ）（蝋燭（ろうそく）原料）・等を植え、藩へ献
胤重（続き）	

名前	履歴
胤重（続き）	上（郷村）。その後、中国地方から紙漉（かみすき）職人を招き、楮（こうぞ）を原料として製紙技術を習得（郷村）。延宝五年（一六七七）、長崎の薬師寺種満から自覚流砲（銃）術を習い、藩最初の武役大砲支配を務める（新撰）。同家は石火矢と火縄銃を専門として自覚流（千葉流）砲術師範を代々世襲（1）。天和十年（一六九七）、隠居し、ト枕と改名（九葉）。宝永三年（一七〇六）、純長、放虎原の管理を飯笹家専属とする（九葉）。純信、純長期。

（盛山隆行）

註

（1）盛山隆行「第一章維新政権の成立と大村藩第一節第一項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第四巻近代編　大村市　二〇一六）

引用・参考文献

「千葉（飯笹）氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之四十一）…新撰

大村史談会編『九葉実録』第一冊（大村史談会　一九九四）…九葉

藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

四．北川次郎兵衛宣勝（松田道獣）系図

松田秀景―秀利―秀宣―北川次郎兵衛宣勝―長倫

名前	履歴
宣勝	浜田治部太輔という。幼名は右馬助、また悪兵作、後に入道号を松田道獣と名乗る。妻は岩永甚吉の娘。天正十九年（一五九一）、一〇歳で伊達政宗に仕える。文禄三年（一五九四）に政宗の仇人を討ち取った功績により三〇〇〇石の禄と、悪兵作の名前をもらう。同四年、浜田伊豆守が奥州宮崎（宮城県加美郡加美町）で戦死し跡継ぎがなかったため、入婿として浜田家を継ぐ。浜田城に住み濱田治部太輔と名乗る。城付ともに四万石を知行する。慶長五年（一六〇〇）に伊達政宗が上杉氏の白石城攻撃の時には、先陣を切って入城し、殊に梁川福島（福島県伊達郡梁川町）攻めの時の戦功は最も華々しかった。同年、政宗が岩出沢（山）城（宮城県大崎市）を守る時、白石城（宮城県白石市）を守り固めた。同十年、事情から伊達家を辞して豊臣秀頼

名前	履歴
宣勝（続き）	に仕え、北川次郎兵衛と号した。同十九年冬、豊臣秀頼に従い大坂城に立て籠もり、元和元年（一六一五）夏、再び籠城し三〇〇騎の将として平野口を固めるが落城し、京都本能寺に囚人として預けられる。同二年、幕命により大村に来る。万治元年（一六五八）、幕命によって宣勝の子供は大村家に仕え、宣勝も従来の預人を改め寄客となった（新撰）。慶安元年（一六四八）、徳川家康の三三回忌の大赦により罪を許される。明暦二年（一六五六）十月十三日に没す（見聞）。喜前、純頼、純信、純長期。

（久田松和則）

引用・参考文献

「松田氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之十七）…新撰

藤野　保、清水紘一編『大村見聞集』（高科書店　一九九四）…見聞

五. 濱田弥兵衛系図

濱田新助――弥兵衛――新蔵

名前	履歴
弥兵衛	寛永五年（一六二八）、長崎奉行水野守信及び長崎代官末次平蔵の命により、子弟、通詞を率いて台湾に赴く。この頃、台湾沖で末次平蔵の商船が阿蘭陀の海賊に襲われ略奪された。弥兵衛は高砂城に入城し阿蘭陀人総督ノイツに末次船への罪を問い詰め、総督の子供・主従の商館員など七〇人を人質として日本に連れ帰った。長崎奉行の命により阿蘭陀人主従は大村預かりとなり、大村城下の田町辺りに牢屋を構えその牢に数年つなぎ、出島が築かれた後は同地へ移送。それから七年後に許されて帰国した。弥兵衛は諸外国を経歴して、遠眼鏡や大砲を造る技術を習得し帰国。寛永六年（一六二九）、加藤忠広の招きに応じて肥後に移り、七〇〇石の家禄をもらう。同九年、加藤家の絶家により長崎に戻り同地に住む。同十九年島原一揆の際、長崎奉行の命により長男新蔵は大砲役を務め島原に赴く（新撰）。純信期。子孫には、幕末の勤王三十七士濱田弥兵衛重義と長男謹吾重俊がいる。

（久田松和則）

引用・参考文献

「濱田氏系譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之三十八）…新撰

六．千々石清左衛門純員（ミゲル）系図

千々石大和守＝淡路守―純員―度馬之助

（凡例）＝養子

名前	履歴
純員	元亀元年（一五七〇）生まれで純忠の甥、喜前の従兄弟（1）。四歳で乳母に連れられ大村へ来る（新撰①）（1）。天正八年（一五八〇）、キリスト教の洗礼を受けミゲルと名乗り、同一〇年（一五八二）、有馬晴信の名代として天正遣欧使節の正使となる（郷村）（1）。同十三年（一五八五）、ローマ教皇グレゴリウス一三世に謁見。同十八年（一五九〇）帰国し、大坂城で豊臣秀吉に謁見（1）。同十九年（一五九一）、イエズス会に入会（1）。慶長六年（一六〇一）頃にイエズス会を脱会。清左衛門と名乗る。

名前	履歴
純員（続き）	喜前に仕え、神浦（長崎市）・伊木力（諫早市）に家禄六〇〇石分の領地を下賜（新撰①）（1）。同十一年（一六〇六）、清左衛門は嬉野通直（勝正）と共にルソン（フィリピン）へ派遣されキリスト教が国を奪う邪悪な宗教と報告し、藩はバテレン追放令発令（新撰①、②、郷村）。喜前と共に日蓮宗に帰依（1）。同年、従兄弟の有馬晴信の許へ移住したが、同十七年（一六一二）前後長崎へ移る（1）。寛永九年（一六三二）死去か（1）。純忠、喜前、純頼、純信期。

（盛山隆行）

註

（1）五野井隆史「第四章対外関係（貿易・キリシタン史）第五節」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第二巻中世編　大村市　二〇一四）、同「第一章幕藩体制の成立と大村藩第三節第一項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

「千々石氏家譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之六十三）…新撰①
「嬉野氏家譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之十七）…新撰②
藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

（六代略）…直考―忠良―忠正

名前	履歴
忠良	始め幸太郎、後に元治と称する。妻は松尾七左衛門の娘。家禄は一五石。安永五年（一七七六）に生まれる（新撰）。天明七年（一七八七）、父の急死により、一二歳で家督相続（新撰）。寛政四年（一七九二）五教館二階詰の学生。以後、寮生、表詰、会頭と進級（新撰）。文化十四年（一八一七）、千綿村横目として同村へ帰り、文政二年（一八一九）から天保元年（一八三〇）まで彼杵、千綿、江串各村の代官勤務（1）。天保元年（一八三〇）城下大給となり、元〆附、吟味役を歴任し、後に徒士組頭席となる（新撰）。同十一年（一八四〇）藩へ隠居願いを提出。隠居名悠々を名乗る（新撰）。隠居後も藩主の近習給人を務めながら、俳句作りを行う（新撰）。同十三年（一八四二）豊後日田（大分県日田市）の儒学者廣瀬淡窓が大村を訪れ、悠々を「九州一番の俳句名人」と讃える（1）。嘉永五年（一八五二）頃の全国俳人番付では常に全国で上位一〇位内（西日本で二位）に入る名人として注目される（1）。安政四年（一八五七）八二歳で没（1）。純鎮、純昌、純顕、純熙期。

（盛山隆行）

註

（1）久田松和則「第五章大村藩の学問・教育、文化、宗教第二節第二項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

『川原（宮崎）氏系譜』（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之三十六）…新撰

八、江頭官太夫顕穎系図

（一〇代略）…種珍―顕穎―弁之丞

名前	履歴
顕穎	通称官太夫。妻は橋口勝傳の娘、後妻は大村通国の姉、三妻は大村景福の妹（新撰）。文化十二年（一八一五）、家督相続（新撰）。文政四年（一八二一）、側詰（新撰）。天保六年（一八三五）、側筒者頭用人（新撰）。同十年（一八三九）、家老兼脇備士大将となり、海防を担当（新撰、九葉④）(1)。下士層の小給からの家老職就任は異例の措置(1)。同年、屋敷を上久原から上小路へ移す（新撰、九葉④、郷村）。同十一年（一八四〇）、藩主純顕から名前一字「顕」を与えられ、顕穎と名乗る（新撰、九葉④）。

名前	履歴
顕穎（続き）	安政元年（一八五四）、用人、兵学師、砲術師、普請方、絵師等を率い外海砲台検査（九葉⑤）。同二年（一八五五）、先手士大将并後機士大将預（新撰、九葉⑤）。同四年（一八五七）、家老として福田台場検査（新撰、九葉⑥）。同六年（一八五九）、外海砲台が落成し、検査と巡視（九葉⑤）。万延元年（一八六〇）、台場完成の功績と一七〇目野戦砲台用の石火矢献上及び勤労を賞される（新撰は前年、九葉⑤）。家禄二七六石五斗八升（郷村）。純昌、純顕、純熙期。

（盛山隆行）

註

(1) 藤野　保「第四章幕末大村藩の基本体制と政治動向第一節第一項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第三巻近世編　大村市　二〇一五）

引用・参考文献

「江頭氏系譜」（大村市立史料館所蔵　「新撰士系録」巻之二十三）…新撰
大村史談会編『九葉実録』第四～五冊（大村史談会　一九九六～九七）…九葉④、九葉⑤
藤野　保編『大村郷村記』第一巻（国書刊行会　一九八二）…郷村

（二八代略）…純方―純景―重方

（凡例）＝養子

名前	履歴
純景	天文七年（一五四九）生まれか（1）。通称甚左衛門。妻は大村純忠の娘トラ（九葉）。長崎村九七〇石余を領し、同地（長崎市桜馬場地区）に居住（新撰）。永禄年間（一五五八～七〇）、中国船と交易（1）。永禄十年（一五六七）、純忠が横瀬浦でキリスト教の洗礼を受けた時、共に洗礼を受けたか（1）。元亀二年（一五七一）、純忠に命じられ、長崎六町の建設に参画（新撰）。天正八年（一五八〇）、深堀氏と伊佐早（諫早市）領主西郷氏連合軍に居城を攻められるが、純忠援軍とフスタ船搭載の大砲によって撃退（新撰）（2）。天正十五年（一五八七）、長崎村と長崎町が豊臣氏の直轄領化に際し、時津村七〇〇石を与えられるが受領せず、筑後国久留米・柳川領主田中吉政の家臣となる（新撰）。後年大村へ帰り、横瀬浦（西海市）に一〇〇石を与えられる（新撰）。元和七年（一六二一）、七三歳で没（1）。純忠、喜前、純頼期。
純景（続き）	

（盛山隆行）

註

（1）五野井隆史「第四章対外関係（貿易・キリシタン史）第三節、第四節第二項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第二巻中世編　大村市　二〇一四）

（2）藤野　保「第三章戦国時代第五節第一項」（大村市史編さん委員会編『新編大村市史』第二巻中世編　大村市　二〇一四）

引用・参考文献

「長崎氏系譜」（大村市立史料館所蔵「新撰士系録」巻之十）…新撰

勝田直子「校訂　大村氏系譜」（大村史談会編『九葉実録』別冊　大村史談会　一九九七）…九葉